

---

J

かっぱ巻き

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

J

### 【Nコード】

N3571M

### 【作者名】

かつば巻き

### 【あらすじ】

とある事故で死んだある男が、ワンピースの世界で新たな生命として生まれる。その男が、この世界で冒険する物語。  
すみません。ワンピースを知らない方はよくわからない作品となっております。

平凡な素人が書いています。文才など皆無です。

2011年2月1日に1〜9話編集しました。

## プロローグ（前書き）

初めまして。

『かつば巻き』と申します。

よろしくお願いいたします。

気に入らない点があると思いますが、どうぞ温かい目で読んでください。

2011年 2月1日。

全話において、主人公の一人称や自分自身が『必要ない』と感じた設定の削除、逆に『必要』と感じた設定追加などを編集しました。

## プロローグ

カランと持ち手をなくしたコップが店の床に落ちる。

木製の床が、落ちたコップの中身のせいで濡れていく。

そのコップの持ち主は、壁に打ちつけられて、今はもたれるように気絶していた。

その衝撃は大きく凹んだ壁が示している。

そんな男と同じ状態の男がもう一人。

そしてその2人が元々座っていた席の近くに、男が一人ずつ立っている。

一人は体全身を隠すように足先まである真っ黒いコートを着ていて、もう一人はハットを被っている。

「お前らよくもやってくれッ」

一人の激高した男が立ち上がりコートの男に掴みかかるようにするが、それは叶わず、なぜか逆に地面に突っ伏した。

すると、他の客や店員までもがバタバタと気絶していく。

一気に店が静まり返る。

その中を、立っているのは2人だけ。

外の賑やかな声と鍋がグツグツと煮込む音だけが聞こえる。

そのうちのハットの男が口を開く。

「お前、名前は？」

「ジエイ」

「」か、いい名だ。オレの仲間にならねえか？」

「……あんたの名は？」

「  
だ」

真っ暗だ。

何も見えない。自分の体さえ分からない。

そもそも目を開けてないから？

それすらも分からない。

ただ狭い。

自分の体分の広さしかない、というより自分がいるからその分だけ空いている感じ。

さらに狭い方向から光がもれているのがわかる。

なぜかわからないが、壁が光の方向へ私を運ぼうとしている。

だから私も進む。

壁がさらに締め付けてくる。

痛い

痛い！！

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

でも……

もうちょっとで光の方へ出れる！！

もう少し。

もう少し。

出れた！！

「！！」

誰かが何かを言ってるような気がする。けど聞き取れない。視界も真っ白だ。

ッ！！！！

息が……！！

くっ空気！！

呼吸を、呼吸をしろ！！

でもやり方がわからない。

うっ！

く、苦しい……。

うわあああああああああ！！！！！！

「オギヤー！！オギヤー！！」

船が波を叩く音、それと同時に何人かが部屋の外の廊下を走る、木が軋む音が聞こえ、私は目を覚ました。

私が新たな産声を上げてからいくらか経った。

そしてその間に私はどうやら生まれ変わった事に気付いた。

数日かけていると記憶を整理していくと、最期の記憶が車にはねられる映像だったからだ。衝突した瞬間の何かを潰すような鈍く生々しい音は、忘れたくても忘れられない。

おそらくは前の記憶を引き継いだまま、新しい生命として生まれ

たのдарうつと思う。

「なんとという幸運!!」

と生まれて初めて、まあ二度目なんだけど、神様に感謝したくらい。

そして今、私はお母さんに抱きかかえられていると思う……。  
なんで『思う』かと言うと、視界は真っ白よりマシにはなったんだけど、まだまだ何も見えないからで、近くの方がぼやくと、まるで水の中で見ているようにしか見えてなく、確認のしようがないからだ。

お母さんとわかったのは匂いと温度と声でとてもとても安らぐからだ。

それはも一瞬で寝てしまう程に。

音は結構聞き取れたりする。誰かが何を言ってるかはわからないが、みんな絶対に言う言葉がある。

「 ジェイ」

多分、それが、私の名前なのだろう。

そしてもう一つ。

これは多分お母さんの名前だと思う。

「  
オルビア」

私の家族がまた一人亡くなった。

『ニコ・アマリア』

私の姉だ。

数年前に私の夫の探索チームに加わり旅に出た。だが、途中で病に倒れ、近くの島の病院で入院した。

それが不幸中の幸いで、彼女を残して先に次の島に行った後に海軍に皆殺しにされた。

今回の探索チームで海へ出るついでに姉を迎える予定だった。けど、迎えた船の上で死んでしまった。

悲しい。

覚悟は出来ていたはずなのに……。  
夫の時に流しすぎて、もう枯れたと思っていたのに……。

涙が止まらない。

だけど、少し嬉しかった。

それは、嬉しそうに……。本当に嬉しそうに微笑みながら死んでいったからだ。

産まれたばかりの男の子をしっかりと抱きしめながら……。

だから私は、姉が自分の命とひきかえに産んだ小さな命を。  
私の腕の中で寝ながらもしっかりと私の服を握り締めている力強い命を、必ず死なせはしないと誓った。

そしてこの子はいつか世界に羽ばたくだろう。

あの2人は平和を望んでいたけど、私はそう確信している。

なんてたって、

天才の姉と、

”冥王”の子ですから・・・。

第一話 『オハラ』（前書き）

2011年 2月1日。  
編集しました。

## 第一話 『オハラ』

穏やかな透き通った海の色、きらきら光る綺麗な砂浜の色、青々と生い茂った森の色が上手く調和した島がある。

遠目から見ても木々が生い茂り自然豊かな様子がわかり、そして何より目立つのが島の真ん中にそびえ立つ大樹。人が住んでるのか所々に窓のような穴が空いている。

それ程までに大きな大きな大樹がある島。

そんな島が、今、私の目の前にあり、近づいて行っている。

理由は簡単。

私をあの島に預けるため。

産まれてから1ヶ月くらい経っている。

すでに目は見えるようになって、最近やっとハイハイが出来るようになった。

そしてその見えるようになった目を使って、さっきから何回もしてる行為なのだが、

一度私を抱いてる女の人を見る。

次に近づいている島を見る。

私はその両方を、前世で現実では見たことないが、見たことはある。

変な言葉だが事実だ。

断言しよう。

私の記憶が確かならば、女性の名は『ニコ・オルビア』。

そして島の名は『オハラ』。

そしてこの世界は、前世でいうワンピースという漫画の世界だ。

目が点とはまさにこの事だ。

まあ、オルビアという名を聞いた時から私はワンピースを思い浮かべてはいたが、もちろん信じてはいなかった。

だって漫画の世界の話だ。そんな夢のような話を簡単に信じられる程、私は簡単な人間ではない。

しかし、ここまで漫画でしか有り得ない髪色をした人達や、漫画がから切り出したようにそっくりな島や人が居れば疑いようがない。

だが、悲しくはない。確かに前世に未練はあるが、死んでしまっただから仕方ない。なぜだか知らないが、そこらへんはしっかり割り切れた。

それに私はワンピースが大好きだから。今となっては、最終話が見れなかったことが未練に入るくらいに。

なぜここにいるかと、なぜ漫画の世界があるかはわからないが、二回目の人生がこの世界になって本当に嬉しい。少年の時のワクワク感が蘇ってくる。

そして、全く話は変わるのだが、前世のみんなに一つ言いたい。

漫画で見るより実物の方が、オルビアさんは数倍美人だ。

これはもう大マジ。

太陽光をキラキラ跳ね返す銀髪。スーッと鼻筋に吸い込まれるような瞳。凜とした佇まいが、気品を出してる。

時より私に向ける優しい眼差しに思わずデレっと顔が崩れる。

ちなみに私も銀髪だったりする。

一度鏡で顔を見たが、髪が長いから本当に女の子みたいで、まるでオルビアさんがそのまま幼くなつたみたいだった。

おそらく、お母さんとオルビアさんは瓜二つだったんだろう。

それと私の親がオルビアさんではない事と、本当の両親が誰かは知っている。

オルビアさんが一度呟いていたから。

まあ、そんな事はどうでもよくて、今一番重要な事は、『ロビンが何歳であるか』だ。

その歳によつては私はすぐ死んでしまふかもしれない。

『バスターコール』

それは海軍本部中将5名に軍艦10隻の国家戦争クラスの軍事力を一点に召集させ、何もかもを犠牲にして目的を達成する悪魔の様な集中砲火をする緊急命令。

ロビンが8歳の時に『オハラ』という島自体を消し去つた力だ。私が前世で一番最期に読んだワンピースの単行本は53巻。ジャンプではもっと進んでいるだろうが、私が知っているのは、53巻まで。

たがら、内容通りならどんなことが起こるか知っている。もしロビンが8歳なら今の私では相当不味い。

そしてそんな事を考え、  
せつかく大好きな世界に生を授かったのだから、早死にだけはしたくない。

と思い、色んな状況をシュミレーションしているうちに、いつの間にか私は眠っていた。

「おめでとう！…！ロビン！…！」

「おめでとう！…！…！」

クラッカーの音が鳴り響き、みんなが口々にロビンに祝いの言葉を言っていた。

今私は、380。全てに本がぎっしりと詰められた『全知の樹』のオハラ図書館にいる。

そして実に気分が晴れやかだ。

この祝いがロビンの考古学者認定の事なら、私は絶望を感じてい

た。

だが、今日はロビンの9歳の誕生日なのだ。

つまりもう『バスターコール』の時期が過ぎたということになるのだ。

だから、今も叫びたいくらいの喜びがある。

でもなぜなのか。

そう考え、自分なりに結論を出してみた。

それは私が産まれて、一旦、オハラに帰らなくてはならなかったからだ。だから本当は見つかるはずだった海軍に見つからなかったのだろう。

まあ理由なんてどうでもいいか。みんな生きているんだから。

今まで生きてきた中で、まあまだ産まれて1年過ぎてないのだが、これほどの安堵感は初めてだ。

それでも誕生日と初めて聞いた瞬間

「よっしやー！……」

と、リアルに伝えるなら

「あっあうー！……！……」

とつい叫んでしまった。

それほど嬉しかった。

自分が死ぬ可能性が去ったのもあるが、何より自分を本当の息子ではないのに育ててくれる学者の人達が、これからも生き続けられる事がたまらなく嬉しい。

私が島についてからずっとここで育ててくれたのがこのみんななのだ。

オルビアさん達は私を預けた後に、ロビンに会わずにすぐ旅立ってしまった。

ロビンを指名手配されている罪人の娘にしくなかつたからだ。

そしてロビンも私を自分の弟のように世話してくれてる。

周りもすでにそうゆう認識になっていた。

そうして暮らしてるうちに、私はある予想外の事が出来るようになった。

それは偶然といえれば偶然だが、必然といえれば必然的に出来るようになった。

になった。

毎晩のこと。

学者のみんなは地下室でポーネグリフの研究をしている。

私はそこで暮らしていて、まだ赤ちゃんだから、そのみんなのいる地下室で寝かされる。

こうなればだいたい予想をつくだらう。

つまり、

私はポーネグリフを解読出来るのだ。

そこでは、たまに私が文字を見ていたら若い兄ちゃんが教えてくれたりする。

向こうはまさか0歳の私が元大学生で結構な知識欲がある事を知るはずもなく、軽々しく教えてくる。

天才の母親の血や年齢的に記憶しやすいのもあるかもしれないが、みんなの会話からでも、簡単に頭に入ってくる。

だから嫌でも、すんなりと理解してしまったのだ。

普通の考古学の知識もある。

そのほとんどがロビンからだ。

ロビンは、なんとなく母親が子供に本を読んであげのを知っていたのだろう。

だが、幼い時から両親がそばに居なかったから、その本がどんな本かは知らなかったみたいで、まさかの考古学の本を私に読み始めたのだ。

私としては、最近解るようになり楽しいのだが、最初は知らない単語がいつぱいで、超英才教育という罰を受けさせられているみたいで酷だった。

それがほぼ毎日続いたから、私には考古学者として十分な知識があるのだ。

そんな事を思い返しながら、私は今が来たこの瞬間を喜び、はしゃいでいた。

たがら私は、この時のクローバー博士のどこか暗い表情に気付いていなかった。

第二話 『来襲』(前書き)

2011年 2月1日。  
編集しました。

## 第二話 『来襲』

「今日はいい天気ね」

ワタシは歩きながら、全く雲の無い晴れ晴れとした空を見て、そうジェイに喋りかけた。

「きゃいきゃい」

すると、向日葵のような笑顔で笑って答えてくれる。その笑顔に心が満たされる。

この笑顔に何度助けられただろう。数えてみたりするが、多すぎて止めた。

ワタシは今、ジェイを連れて最近できた友達の所に向かって散歩している。

そしてもう一度、嬉しそうに周りを眺めているジェイを見る。

お母さんと一緒の銀色の髪の毛。顔はワタシに似てる。お母さんの顔はワタシがまだ幼かったから覚えていない。けど、周りの人は「まるでお母さんが赤ちゃんになったみたい。」と言っていた。

だからちよつと羨ましい。ワタシもお母さんと同じ髪の色が良かったし、こんなに似てるなら本当の弟が良かったな…。

そんな事を考えながら歩いていたら目的地に着いた。

海からのカモメの鳴き声が間断なく聞こえる林の中。その中にポツンと一人、三角座りしてる巨人がいる。

そしてその巨人にワタシは手を振り呼んだ。

「サウローー!!」

そう言った後、ジエイを見ると、目が見開かれ、顔が真っ青になり、まさに”絶望”という言葉がぴったりの表情をしていた。

「どうしたの?」

と聞いてみたけど返事はない。ワタシの声すら届いてないかもしれない。初めての巨人にびっくりしたのかな。

「大丈夫よ。ジエイ」

そうワタシは落ち着かせるようにジエイの頭撫でた。

「ロビン。イカダができたでよー!!」

サウロの所に行くともまた「デレシシシ」と変な笑い声をあげながら報告してきた。

「……じゃあ、もう行っちゃおうの?」

嫌だなあ、せつかくお友達になれたのに。また誰か離れて行くな  
んで嫌だよ。また1人なんて嫌だよ。

「そついや、旗でもつけようと思うとつたところだ！もう少しこ  
におるでよ！！デレシシシ！！！！」

やった！！

この言葉を聞いてワタシは自分でも表情が綻んでいるのがわかっ  
た。

この島の友達はサウロだけだったから本当に嬉しかった。

このままどんどん出航を引き伸ばして、ワタシが大きくなったら  
一緒に乗せてもらおう。そしてお母さんに会おうんだ。

そうワタシは心の中で計画をたてた。

「その子はだれだて？」

ワタシがひっそりと計画をたてる間にサウロがジエイに気付いた  
みたい。

「ジエイよ。ワタシの弟」

意地を張って弟と言ってみた。半分あってるからいいの。と自分  
に言い訳をつける。

「おめえ弟おつただてか！！デレシシシ！！！！一瞬、女の子かと思  
つただて！」

サウロは一頻り笑った後で今度はジエイの顔をじっくり見だした。

サウロの目の大きさをくらのジェイもがっちりサウロを見つめ返す。

なんだかサウロの顔が陰しく見える。端から見れば、まるでジェイを食べようとしてるみたいに見える。

「まるでオルビアみたいだて」

え？今オルビアって言った？

「お母さんの事知ってるの？」

それを言った時、サウロは石のように動かなくなった。

どっしりよ…どっしりよ…。

自分の鼓動が強く速く打っているのが何もしないで感じる事ができる。

今はロビンも居ない。サウロに言われて全知の樹に走り出した。だから私はサウロに預けられてるような形だ。

「何ちゆうことだ…すまねえ…ロビン…!!!!」

ふと絞り出すような声が聞こえてサウロを見ると頭を抱えていた。

「あつうー!」

『早く逃げよう!』

と本当は言いたいのだが、まだまともに喋れない。

くそ!!何かないか!?何か私ができる事が…。

喋れないし動けない自分に対する怒りと焦りを抑えながらそれを必死に考える。

だが無情にも、時間は過ぎていく。

ガバツ!

サウロがいきなり立ち上がった。何かするのかと思ってサウロを見るが、立ち上がったまま動かない。よく顔を見ると頬には冷や汗が流れ、目は大きく開かれている。

そして私は不思議に思っ、サウロの視線の先の海を見る。

「大変だだよ…もう見えてるトコまで…軍艦が押し寄せて来とるで……」

静かな海の上に、うっすらと帆にカモメのマークが見える10隻もの軍艦が、ゆっくりとだが確実に近づいて来ていた。

それを見て私は戦慄を覚えた。

サウロ動け!!

「うわあああん!!」

そしてサウロは私を持って走り出した。

速く

速く!!

ハア、ハア

サウロの息遣いが聞こえる。

速く!!

「あつう!!」

「わかってるだて!!もうすぐだて!!」

なんとなく伝わるのか、私の叫びに返事しながら走ってる。

私が急かしてる理由。

それは私が唯一できる事にある。

話せない動けない私が唯一みんなを助ける事ができるかもしれない方法とは、サウロをできるだけ速くCP9長官のスパンダインに会わすこと。

【バスターコール】は、『ゴールデン電伝虫』という特殊な電伝虫を押さないと施行されない。だから、スパンダインがそれを押す前になんとかサウロを合流させ、それを奪えば時間は稼ぐ事くらいは出来るはずだ。

本当は自分で動きたい。全てとは言えないが知っている自分が動き、喋ることができたならば、全てを助けることができたかもしれない。

そう考えて自然と歯を食いしばってしまっ。

だが今は後悔するべき時ではない。今は今できる事をするべきだ。

たがら考えた。

今できることはサウロを急かし、そして間に合うように祈ること。今の私には悔しいがこれしか出来ない。

目を閉じ祈った。

頼む！！間に合ってください！！

「ゼーッゼーッ」

風をきる音、サウロの息遣い、自分の鼓動。  
聞こえるのはこれだけ。

その中をただ祈り続ける。

「見えただて!!!」

私はバツと目を開き視線を前へ向けた。

確かに見える。おそらく博士達だろう人と、黒い服を着たCP9  
と思われる人。そして砲撃もまだだ。思わずガッツポーズしたくな  
る程の喜びがこみ上げてくる。

よし!!!

と思ったが、ふと奥の全知の樹に目が行く。

煙が上がってる？

そう思った刹那。

ズドオオン！！！！！

思わず耳を塞いでしまいたくなる轟音。見えていた景色が全て赤色と黒色に変わり、ずっと風に当たっていたせいで冷たかった肌が、一気に燃えるような熱さになった。

第三話 『別れ。そして…』 (前書き)

2011年 2月1日。  
編集しました。

第三話 『別れ。そして…』

真っ暗だ。

何も見えない。

だからこそ、さっきの爆発の炎の残像がくつきりと見える。

ただ、軍艦による砲火の爆発音が絶えることなく響き渡っている事だけがわかる。おそらく、サウロの手が私の上に被せられているんだと思う。

ふと、サウロが立ち止まったのがわかった。

「！！。」

誰かが何かを言っているのがわかるのだが、手が被せられているのと、大量の爆発音で聞き取れない。

くそ！！誰に何を言っている？ロビンは？みんな無事なのか？

とりあえずどんな状況なのか知りたくて焦っていると、今度は視界が真っ白になった。

「よかった」

暗闇から急な明かりの変化にだんだん慣れていき、声のした方へ視線を向ける。

オルビアさんだ。

私が無事なのを確認して安堵の表情を浮かべていた。

そしてオルビアさんに泣きながら必死に離れまいとしがみついているロビン、それを静かに涙を流しながら悲痛の表情をして見ているクローバー博士がいる。

「お母さん！！離れたくないよ！！…やっと、やっと会えたのに！！ずっと一緒にいたい！！」

泣きながらも精一杯に言葉を繋ぎながらそう主張し、またしがみつくとロビン。

オルビアはロビンを抱きしめようと手が動いたが、一度唇を噛み、手をロビンの肩にそっと置き自分から引き離れた。

「ロビン」

そして今度は安心させるような穏やかな表情に穏やかな口調で、ロビンに語り出した。

「オハラはの学者ならよく知っている筈よ。歴史は人の財産。あなたがこれから生きる未来をきつと照らしてくれる」

ロビンは真っ赤に腫れた目で、まだ涙を流しながら、しっかりと自分の母を見つめた。

「だけど、過去から受け取った歴史は次の時代へ引き渡さなくちゃ消えていくの」

一度私を見て微笑み、また喋り出す

「オハラは歴史を暴きたいんじゃない。過去の声を受け止めて守りたかっただけ。」

再び、ロビンの目から大粒の涙が溢れ出す。だがその目はしっかりと自分の母親を見つめている。

「私達の研究はここで終わりになるけど、…たとえこのオハラが滅びても…」

それを見てオルビアさんの目にも涙が浮かび、声が震えそうになるのを間を空けることでなんとか抑える。

「あなた達の未来を…私達が諦めるわけにはいかない…!!」

「わがらない!!」

「いつか、わかるわ」

涙で前が見えなくなり、ロビンは手で拭いては拭いてはまた溢れ出す涙を、もう一度拭う。

その手をオルビアさんは掴み、黄色い小さなピアスを2つ、ロビンに渡した。

ロビンは不思議そうにそのピアスを見る。

そして、その隙にオルビアさんはロビンを抱えサウロに託した。

「サウロ!!行って!!」

「…ええんだな!!」

そのサウロの問いに頷き返す。

「いやだあ!! 私もここにいる!! お母さん!!」

ロビンの悲痛な叫びが燃え盛る炎の音の中を突き抜ける。

その声に唇を噛みながら聞かぬふりをしてサウロは走り出した。

「お母さあああん!!」

そう再び呼ばれた瞬間、オルビアさんの目から今までずっと抑えられていた涙が溢れ出した。

「生きて!!!! ロビン!! ジェイ!!」

「お母さあああん!!」

涙が止まらない。

ずっと一人だった、たった9歳の少女。その少女がずっと帰りを待ち続けたお母さんとやっと会えたのに、すぐに今度は永遠の別れになった現実に。

その少女がもう見えないお母さんを泣きながら何度も呼ぶ叫び声の悲しさに。

そして、そうなることを知っていたのに、逃げることも、防ぐこ

とも、何も出来なかった自分自身に対する悔しさに。

涙が止まらない。

もう、何も考えることができない。

ただただ、悔しく、悲しい。

この島の歴史は、いつか、お前たちが語り継げ！！！！ロビン！  
！ジエイ！！

働かない頭の中に、こんな言葉が飛び込んできた。

語り継ぐ…、私にそんな資格があるのか？

ただの漫画だと思ってた私に。

知っていたのに何も出来ない私に。

「なにより、違う世界の部外者の私に……」。

そんな資格があるのか？

なんで…、なんでこの世界に来さした！！　なんで前の記憶を残

さした！！　そして、なんで私なんだ！！

見たこともない神様に怒りをぶつける。

もう、何もわからない。私の存在意義、ここにいる理由、今生きて  
いる意味さえも。

こんなに悲しいなら、いつそ死んでしまった方が楽かも…  
ふとそんな事が頭に浮かぶ。だが自分で死ぬ事もできない。  
無力無力無力無力無力無力無力。

「……」

焼けるような熱さを感じていた肌が、何かの音が聞こえたとたん、  
今度は突き刺さるような冷たさを感じた。

それによって私は現実の世界に戻った。

戻ったとは言っても頭は現実の事に対して働いていない。

ただ目だけがある一点をじつと凝視し続けているだけ。  
人が沢山乗っている大きな船を見ているだけ。

そして見続けている中で、あれが避難船だと気付いた時だった。

ドォーン!!!!!!!!!!

一瞬、何が起きたのか理解できなかつた。  
そして暫くしてから理解する。避難船が吹き飛ばされた事に。

それはまるでスロー再生をしているかのようになり、ゆっくりと時間が過ぎていつてゐるみたいだった。

だから私は、はつきりと見てしまった。

燃え上がる船の中で、起こっている出来事。

炎に包まれて誰か助けを求めている小さい子供。 顔や腕が焼けただれている女性。

口からは血を流し左肩から先がない男性。 海には、元は人間を形成している一部だった、腕やバラバラになった肉塊が浮いている。

原作では描かれる事がなかった部分が、より鮮明に、はつきりとした現実として見てしまった。

私だけ時間が止まったようだった。

船の上で泣き叫ぶ子供達の声に耳を塞ぐことも、人が焼ける異臭に顔を歪める事も、あまりの現実に泣き叫ぶ事も出来なくなった。

本当の本当に何も考えることができなくなった。

目を閉じれば、いつもは虫達の大合唱と風に揺れる木々の音が、森や家全ての燃える音やそれらが倒れる音。

上を見れば、いつもは見渡す限り満天の星空が、炎と煙で真っ赤。

後ろを見れば、いつもは静かな森の真ん中に島全体を見守るように立っている全知の樹が、炎に呑み込まれ、ついに倒れて炎しか見えない。

そして海を見れば、真つ赤な血の海と、氷で作られた航路を振り返りもせずまっすぐに、たった一人で進む、たった9歳の女の子の姿。

その小さい背中にどれほどの重荷を背負って、これから生きなければならぬのか。想像もできない。

それでも、しっかりとオールを漕ぐ姿に心を打たれる。

こんな小さい少女でも生きる決意をしているのに、私は何をしているんだ!!

「これでよかつたんだよな？サウロ」

そう呟いた私を抱いているクザンを見る。クザンも私を見る。

「お前も、オハラやサウロの為に、強く生き抜いてみせるよ」

最後にそう呟き、来た方へ歩き出した。

私は何故ここにいる？

それはわからない。だが私はもう迷わない。

部外者の私に？

違う。前の私は死んだんだ。何故かはわからないが、現実  
に生まれただ。昔を見るな。

今を見る。

私は『ニコ・ジェイ』。

『ニコ・アマリア』と『冥王』の息子。

出身地は『オハラ』

お前達が語り継げ！！

そつだ。私は語り継がないといけない。

生きて！！ロビン！！ジェイ！！

生き抜かないといけない。

オルビアとアマリアの子供の頃にそっくりじゃ。

この文字はこういう意味なんだぜ。ジェイ。

今度は大切なモノを失わないように、誰にも奪われないように、  
強く、強くなる。

今日は歴史考古学についての本を読んだあげるね。ジェイ。  
いつか、必ず仲間に会えるでよ!!!  
そして、私にもいつか会える仲間も、またいつか再び会えるロビ  
ンも、全てを守ってやる!!!

必ず!!!

【16年後】

東の海のとある島。

めったにない大漁に活気づく市場を抜け、メインストリートに出  
る。

そこに列ぶ一軒の年季の入った飯屋がある。

その飯屋を覗いてみると、昼時を過ぎたにもかかわらず、まだたくさんの客で賑わっていた。

その一番奥の座席に大柄なチンピラ風の男が4人陣取っている。

「この悪魔のガキ、今はもう何歳になるんだ？」

「知らねーな。こんな悪魔早く死んじゃえばええのに」

「ちげえーね」

ハツハツハツハ！！

そんな会話と馬鹿でかい笑い声が響く。

一方、入り口側では金髪の男達が

「ゴールド・ロジャーがいるから世の中腐ってるんだよ」

「最悪のクズだな」

ひゃひゃひゃひゃ……

こんな会話をしている。

その時だった。

ドンッ！！ドンッ！！

一瞬にして金髪の男とチンピラが吹き飛び、それぞれの元いた場所には二人の男が立っていた。

いきなりの出来事に周りは静まり返った。その中で吹き飛ばしたであろう本人の二人はお互いを見合ったまま、全く動かない。一方はフードをかぶっていて、もう一方はハットをかぶっている。

やっと現状を理解したチンピラや吹き飛ばされた男の仲間達が怒りだす。

「お前よくもやってくれッ…」

ガチャンッ！！と一人の男が倒れる。すると、次々と立ち上がった男達、普通に飲んでいた客、店員までもがバタバタと倒れだした。

その中を二人だけが立っている。

どこからともなく一陣の風が吹いき、それによりフードが取れる。

少し長めのそれ自体が光ってるような綺麗な銀髪と、まるで女のように見える顔立ちに右耳には黄色いピアス、左目は髪に隠れてる

が右目はブレることなく真っ直ぐにもう一人の男を射抜いている。

その視線を受けてか、もう一人の男はニヤリと笑い、口を開いた。

「お前、名前は？」

「ニコ・ジェイ」

そう聞いて、男は人懐っこい笑顔になった。

「」か、いい名だ。オレの海賊の仲間にならねえか？」

その思わぬ誘いに、ジェイは少し驚きの表情を見せる。

「あんたの名は？」

深くかぶっていた、喜びと悲しみの2つの表情が描かれた飾りを付けた赤色のハットを、人差し指で押し上げる。

「エースだ。ポルトガス・D・エース」

プロローグ『完』

第三話 『別れ。そして…』 (後書き)

どうも。かつぱ巻きです。

読んでくださってありがとうございます。

プロローグが完結いたしました！！

いや、はっきり言ってなめてましたね。漫画を文章にするのは、元々イメージがあるから簡単かなと思っていたんですが、なめてました。

めちやくちや難しいですね。すっかりイメージ通り描写しよとしても文才がなく、イメージと外れて上手く出来ませんでした。テンポのいい会話なんかダメダメでした。痛烈な違和感を感じた方、申し訳ないです。

でもまあプロローグが終わったので一息一息。

これから本編に入るので、ワンピースらしさをちょっとでも感じてもらえるように頑張ります。

これからもよろしく願いいたします。

第四話 『ジョーカー』（前書き）

第一章

【東の海編】

2011年 2月1日。  
編集しました。

## 第四話 『ジョーカー』

「待てー！！」

真夜中

身の丈もある灰色のコートを着、そのフードで顔を隠した人が真つ暗な裏街の細道を走り抜けて行く。

後ろからは強面の屈強そうな男達が、必死の形相で追いかけている。その男達はみな、頭に黒いバンダナを巻いており、その真ん中には海賊の印である『ジョリー・ロジャー』のマークが描かれていた。

逃げる者は、街の曲がり角を、右へ、左へ、また右へ曲がり、必死で振り切りろうとするがその差は徐々に縮まってきている。

そしてついに、

「くっ！！」

ガチャーン！！

僅かな段差に躓き、豪快なヘッドスライディングを決めた。  
手に抱えていた宝石袋が落ち辺り散らばる。

「くうッ！！」

痛みに耐える女性特有の高い声。転けた反動でフードが取れ、セ  
ミロングのオレンジ色の髪が露わになる。幼さが残るその少女の顔  
は、転けた痛みに歪め、体を蹲る。

だが、近づいてくる足音が聞こえ、直ぐに起き上がる。

しかし、

「残念だったな。ここまでだ。」

逃げる先には、追いかけている海賊の船長が仁王立ちしていた。

「ッ！！」

後ろに逃げようと振り向くが、すでに追ってきた男達がいた。

ドンッ！！

「ぐッ」

男に一瞬にして壁に叩きつけられ、首を絞められる。

「女だったか。まあどうでもいい。わしの財宝に手を出したのが運

の尽き。死んでもらう」

男はそう言っ、少女の細い首を掴んでいる手の力を、少しずつ強めていく。

「ううッ」

少女はその手を外そうと試みるが、全然外れない。  
だんだんと意識が朦朧とし、目の前が真っ白になっていく。

（私死ぬんだ）

そう頭で理解した瞬間、今までの過去が走馬灯のように少女の頭を通り過ぎていく。

（嫌だ。死にたくない!!）

悔しさで涙が流れ出した。

（誰か助けて!!）

「買ってやりますよ!!」

（何をよ!!）

少女は意識がなくなる寸前に、別の男の声に渾身のツッコミを入れ、意識を手放した。

「スピード海賊団。オレが船長の海賊の名前だ」

こじんまりとした小さいバーで、2人の男が会話している。ジェイとエースだ。その後、騒ぎが起こる前に今の店に移ったのだ。

あの『オハラ的事件』から16年が過ぎた。あの時、まだ赤ちゃんのジェイをクザンが保護し、7歳になっただけに”東の海”で独り立ちした。

何故7歳なのか。

ジェイは世間で言えば犯罪集団の生き残りだ。まあクザンの配慮でそれはバテてなく、普通の孤児として扱われていたのだが…。

それでも、ずっと保護する訳にはいかない。

だから7歳になると、ここに残って海軍になるか、それとも独りで生きるか選択させられたのだ。

もちろん、ジェイは海軍なんかになる気は毛頭無く、逆に今すぐにも離れたかった。

自分の島を消した、自分の大切なモノを壊した海軍や政府の人間がそこらへんに彷徨っているのだ。拒絶反応が出るのが普通だ。

特に1人の男。

その男を見るたびに、ジェイの中に抑えきれない程の殺意が沸き起る。

因みに言つと4つの海の中で一番弱い”東の海”なのもクザンの配慮だ。

それゆえに、独り立ちした後の人生は本当に過酷だった。

何せ7歳だ。毎日死と隣り合わせ。

前世の記憶があつても、それでも死に物狂いで生きてきた。

そして必死に強さを目指した。

オハラのみんなとの約束、そして自分の誓いのために。

「じゃあ私はスペードの”J”。つまり”ジャック”ですか」

「いや、まだ2人しかいねえから、お前エは副船長だ。だから“ジョーカー”だ」

その後はずつと前から決めていたと付け足して、エースは食べかけの骨付き肉を食べ出した。

「”ジョーカー”…。”道化師”ですか…。いいでしょう。エース、って寝てるし」

右手には肉を持ち、顔は飯の中突っ込んだまま器用に寝ていた。

それを見てジェイは一度大きな溜め息つく。

だがその表情はどこか嬉しさを含んでいた。

(サウロ。やっとあなたが言っていた本当の”仲間”に出会えましたよ)

ジェイは何故自分が会ってすぐのエースをここまで信じられるかわからなかった。原作の知識はあるが、名前を言われるまで全く忘れていた。

ただ、出会った瞬間、目が合った瞬間に何かに引き寄せられた。それはエースも同じ。お互いが言葉では言い表せる事ができない何かに、惹かれ合ったのだ。

(それじゃ私はエースのための切り札にでもなりましょかね)

そう心の中で誓い、やっと出会えた”仲間”に喜びで心が満たされ、自然とジェイは静かに微笑んでいた。

「何一人で笑ってたんだ。気持ちわりい」

「……いつ起きたんですか」

「今」

「……」



夜。

あれから二人は結局エースが食べ終わるまでに、三回同じやりとりをした。そのせいでエースは頭にたんこぶが4個ほどできてたりする。

そして、それから二人は今後のことを話し合い、今日はとりあえずこの街で夜を明かすことになった。

パチ

ジェイは何かの物音で目を覚ました。

一度エースが気持ち寝ているのを、確認し聞き耳を立てる。

「。」「

ジェイは小さい頃から、生きるために小さな物音や、情報を得るために他人の会話などを聞き逃さないようにしていた。

だから小さな物音で反応し、他人の会話について聞き耳を立ててしまうのだ。

( ……泥棒ですね。 )

聞き取った内容からそう判断し、ジェイは再び安らかな夢の中へと旅立とうとした。

だが、

トン！

ジェイが寝ている真横の壁からくる衝撃によってそれは阻害される。

「……なるほど。そういうことですか」

(わかりました。喧嘩を売ってるんですね。売られた喧嘩は勿論……)  
流石に二回目にはジェイも頭にきたみたいだ。起きあがり、窓から外に飛び出す。

「買ってやりますよ！」

そう言って音源の方を見ると、そこにはジェイを見て驚愕の顔をした男と、その男に首を締められながらも必死に左手をビシッと、まるでツッコミを入れてるかのようにしている女の子がいた。

(左肩に刺青……オレンジ色の髪……ッ！)

「ぐへッ！」

気付いた瞬間、ジェイは一瞬で男に近づき、仲間がいる方へ蹴り飛ばす。

そして倒れそうになる女の子を抱える。

(ナミ。久しぶりですね)

その女の子は原作より少し幼い感じがするが確実にナミだ。

「お頭!!」

仲間達が自分達のお頭に近づき無事を確認する。

そして、吹き飛ばされた怒りをぶつける為にジエイの方を向くが、

「おい!!お前お頭になんて事……」

そこには、ジエイとナミは居らず、盗まれていた自分達の宝石が地面に散らばっているだけだった。

チュンチュン

まだ日が昇ってまもない清々しい早朝。

空は快晴。風は東南。

穏やかな波と同じように、街も珍しく静かである。

そんな街の中を、

「や、止めるジジイ!!--」

ガバツ

汗をビツシヨリかいて飛び起きたエースの叫び声が響き渡った。

「どうしました？顔が真っ青ですよ」

すでに起きて自分のベッドに腰掛けているジェイが驚いた顔で尋ねる。

「いや。大丈夫だ。満面の笑みのジジイがオレの弟と一緒にオレをデカイ風船にくくりつけてどこかに飛ばそうしている夢を見たただだ」

「どんなジジイですか」

そう言って震える体と乱れた呼吸を整えて最後に「夢で良かった...」とエースは小さく呟いた。

そしてジェイを心配そうな顔で見る。

「.....なんですか？」

ジェイはその表情を見て、怪訝な顔をする。

「.....ロリコンか？」

「違います!!」

素晴らしい速いツッコミを入れて、ジェイは自分の腰掛けているベッドで寝ているナミについて、昨晚の出来事を説明した。

「……なるほど。それで誘拐してき「助けたんです!!」

「わかった!! わかったからその握り締めた拳を下ろしてくれ!!」

「……仕方ないですね。そんな事より話があるんですが……」

そう言ってジェイはナミの左肩にある刺青を見せる。

それはナミが小さい頃に無理やり描かれた刺青。

それを見てエースはジェイの言いたい事を理解したのか、ニヤリと笑って喋り出した。

「……なるほどねエ。……お前やっぱりロリ

ゴツン

「ツッ!」

痛がっているエースをスルーしジェイは説明しだす。

「懸賞金2000万ベリー、通称”ノコギリのアーロン”。グランドラインに入る前に、この刺青のアーロンを打ち取って、名を上げませんか?」

そう言ってジェイは差し込んできた柔らかい日の光と同化して、

まるで天使のような微笑みを浮かべエースを見る。

しかし、

「ぐがー」

見事な程立派な鼻水風船を作って寝ているエースを見た瞬間に、それは悪魔の微笑みに変わった。

「……………」

ゴツーン!!

「ギヤアアアア!!」

そのまま悪魔はまだ眠るナミを抱え、痛がるエースを引きずりながら自分の船を停めている船場に向かった。

#### 第四話 『ジョーカー』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。  
かつぱ巻きです。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

ジェイの口調、三人称か一人称などいろいろ迷いに迷い、わけがわからなくなりました。  
コミカルに書けているか、すごく不安です。

お願いします。

もし変な所があれば教えてください。

第五話 『実力』（前書き）

2011年 2月1日。  
編集しました。

## 第五話 『実力』

スピード海賊団プラス人質は、ジェイのなんの飾り気のない小舟の上にいる。

風は追い風、波も穏やか。只今まっすぐにアーロンパークのある南西に向かっていている。

「海賊のクセになんで船がないんですか」

コンパスと地図で方角を確認しながら、呆れた口調でジェイが言った。

「燃やしちまった」

寝転びながらハハハと笑って言うエースと、それを見て溜め息をつくジェイ。スピード海賊の初航海は至って平和である。

「船の上で、潰した海賊から奪った悪魔の実を食べたんだ。んで、能力を試そうとしたら体から炎が出て燃えちまった」

「能力者なんですか？」

ああと肯定し、エースは頭の後ろで組んでいた手を前にもっていき、人差し指だけを突き上げる。

するとどうだろう。その爪から先がライターから出るくらいの炎に変わった。

この能力は”メラメラの実”。全身を炎に変へ、自在に操れるよ

うになる能力。

それを見てジェイの目はさらに大きく開く。

「おお。ロギアですか。大分バケモンな体ですね」

(そういえばそうでしたね。すっかり原作の内容、忘れてますね)

「便利便利と言いながら感心しているジェイに向かって、今度はエースが尋ねる。

「そのオレを殴れるお前もバケモンだ。お前も能力者なんだろう？」

エースは疑問に思っていた。

確かに戦闘モード以外だと殴ることはできる。だが一度だけ、殴られるのを防ごうと火になるうしたが結局殴られてしまったのだ。

「そうですよ。私は、言わばあなた達、能力者の”天敵”」

そう言っただけジェイはエースの手を掴む。

「な、なんだか、ちからが…入らねえ」

それを見てジェイは掴んでいた手を離す。エースはその手から、炎を何回も出し能力が戻ってるか確認する。

「私は”ミズミズの実”の能力者です」

『ミズミズの実』

それは悪魔の実の中でも異質中の異質。能力者に触れるだけで能力者は力が出せなくなる。ただし、ロギアではない。全身が水という概念だけである。だから一般人には何の意味もないのだ。そしてもちろん泳げない。

「ロギアではないんですけど」

ジエイは船の最後尾に立つ。風で黒いマントが揺れる。

そして右手を前に伸ばし、まるでアツチケみたいな動作で手を払った。

水という概念を広げた事により、手を払った振動がそのテリトリ内で波を作る。それがだんだんと広がり、遂に海に辿り着き

ザパーン!!

「うおッ!!」

立派な波を作る。

それにより船のスピードがあがり、エースが驚きの声を上げる。

「こんな事ができます」

「なんつーセコい体だよ」

「……まあ、否定はしません」

セコい体と言われ若干落ち込みながらも、自身でもそう思ってい

るため何も言い返せない。

「…もしかしたらオレ達は最強かもな」

「ふふっ。そうかも知れませんか」

真面目な顔でそう言うアースと、今度は逆に微笑むジェイ。

ロギア的能力者と全ての能力者の天敵。確かにこれほど敵として厄介なコンビはめったにいないだろう。

「頼むぜ。相棒」

「任せてください。相棒」

そしてアースとジェイは笑いながら、お互いの拳をぶつけ合った。

「ん…」

そんな時、ナミの体が僅かに震え、目がつつすらと開く。

「おっ！！やっと起きたか」

「大丈夫ですか？」

騒がしくなったせい、やっとナミが目を覚ました。

しばらくナミはまだ頭が動いていなく、ボーっとしている。

(私生きてるの?)

ナミはボーっとしたまま、目を自分の横に座っているジエイに向ける。

「女の人？」

「……………男の人です」

ジエイの応えにエースが目を見開き、驚きの表情になる。

「なんでエースが驚いてるんですか!!」

「いや、オレはてっきり……………オカマかと……………」

「それでも一応男です!!そしてオカマでもありません!!」

二人がワーワー言い合っている間にナミは周り見る。

「ッ!!ちょっと!!なんで私は海の上にいるのよ!!」

その声に騒いでいる二人はナミを見、ナミは二人に詰め寄る。

「何言ってるんだお前」

「な、なによ!!」

それに対し、エースは不敵に笑いながら言った。ナミの顔から血の気がなくなる。

(まさか、私捕まって……海のと真ん中に捨てられるの?)

殺される!!--とナミの頭にそんなことがよぎる。

「ここは”船の”上だ」

「わかってるわ!!--」

その言葉に、ナミは地団駄を踏みながらツッコミを入れ、ジェイは頭に手を当てて大きな大きな溜め息をついた。

「エース、あなたは邪魔なので黙るか寝てください。私が説明します」

するとエースはズーンという効果音と共にもの凄い勢いでいじけだした。

そんなエースを無視してジェイはナミに喋りだす。

「久しぶりですね。ナっちゃん」

「え!?!なんで私のこと……」

(この声と髪…もしかして)

「”暗殺者のケイ”!?!」

「そうですよ」

ナミは大きな目をさらに大きく、いじけていたエースも振り向き

ジエイを見た。

正確には”暗殺者K”。

これは2年前に、ある大陸のある事件により、爆発的に広まった呼び名である。

その事件とは、一夜に一人の人物によって、CPと海軍合わせて死傷者約1000人、そしてその地域のCPの本部が全焼させた事件である。

犯人については性別、年齢共に不明。ただわかっているのは、全身を覆うくらいの灰色のロングコートに、顔には悲しい顔の半分は白、もう半分は黒色に塗られた仮面をつけていた事だけ。

ほとんどの被害者達は犯人の姿さえ見る事が出来ずにやられていたのだ。

世界政府はこの事件を凶悪なテロ事件とし、その風貌の男が以前”K”と名乗って活動していたとの報告を受けて、その犯人を”暗殺者K”懸賞金5000万ベリーの国際指名手配犯とした。

だが、本当にテロなのか？

不自然にも何故犯人がそんな事をしたのか、その動機について言及する記事は一つもなかった。

ただ一つ関連として付け加えるなら、事件の2日前に、ある黒髪の少女が本部の近くの川に残酷な姿で捨てられていた。

だが、本当の事件の真相は謎のままである。

その犯人の正体が目の前にいるジエイだったことに、エースは驚きを隠せずにいた。

「もう暗殺業は引退したんで下手にKと呼ばないでくださいね。本名はジエイですから」

そう言っただけジエイは二人に微笑む。それによりやっと二人はそれぞれに反応した。

「えらいやつを仲間にしたもんだ」

「良かった。無事で……」

エースはジエイの正体に大笑いし、ナミはジエイが生きていた事に安堵の表情を浮かべた。

ナミはジエイに事件以前に何度か助けられ、手を組んだこともあった。

そして謎の仮面に対し、少し憧れの気持ちを抱いていた。

そしてその人がいきなり指名手配され、消息が掴めなくなり、もう死んでいるのではないかと心配していたのだった。

(うわぁ、もっとキレイな顔になってる……)

「ナっちゃんに会うのは2年ぶりですね。綺麗になりましたね」

間近で微笑みながら言われ、ナミの頬が少しピンク色に染まる。

「心配してくれてありがとう」

ナミは自分の赤い顔を隠すように、ジェイの瞳から逃れるように、サッと俯き、小さく頷く。

その小さな頭に手を置くジェイ。

その手の温もりを感じ余計に赤くなり、顔をあげれず、されるがままになるナミ。

太陽の光を反射しながらゆったりと揺れる青い海、そしてその青さとまた違う雲一つない青空。

それらが背景となり、邪魔がなければ一つの絵画のように美しい光景だった。

そう

邪魔がなければ……

「ぐがー」

「……………バカーー!!」

ガッーン!!

「ゲヘツ!」

暫くして、なんとかジェイが必死に止めに入ること、ナミの怒りは収まった。

「で、なんで私はここにいるの?」

まだ顔に赤さが残るナミが再び尋ねる。

「人質」

「人質ってどうゆうこと!」?

「オレらは今からアーロンを打ち取りに行くんだよ」

エースがそう言った瞬間、ナミの顔から血の気がなくなる。

「ダメ!! アーロンだけは絶対にダメ!! 殺されるわよ!!  
てゆうかなんであんだ達がアーロンを殺しに行くの!」?

「私達は、実は海賊なんですよ。だから名を上げるためにね」

“海賊”という言葉に表情が豹変する。

「…なんだ。あんだ達、海賊だったんだ。…じゃ勝手に戦って殺さ

れて死んでしまえばいい！！！！」

ナミの目つきが一気に鋭く冷たくなり、噛みつかんばかりに二人を睨みつける。

「所詮あんたもただの人殺しなのよ！！ そりゃ人殺しなら”あの子”にも愛想つかされるわ！！」

「……黙れ」

「ッ！！」

静かに言い放ったジェイの言葉に、有無を言わせぬ力があり、その猛烈な圧迫感にナミは押し黙る。

船は一気に静まり返った。

「……」

暫くの沈黙が続く。

その沈黙を破ったのはエースだった。

「どうでもいいけどよ。お嬢ちゃん、オレら今から戦つからさ、ア  
ーロンとどっちが強いか見てくれよ」

あつちあつちと船の先を指差しながら言った。

その指の先にはこの船より10倍はある3隻の海賊船が迫ってきていた。

「なッ!！」

それは夜にナミが殺されかけた海賊だった。

「昨日はよくもやってくれたな!！覚悟しやがれ!！!！」

「!！覚悟しやがれ!！!！」

バルン海賊団お頭” 剛剣のバルダ”  
懸賞金1700万ベリ!。

「いいですね。お互いの力の見せ合いですね」

バルダとその部下の叫び声を無視し、エースとジエイは船に向かって構える。

「初戦闘だ。オレは右をやる。ジエイは左をやってくれ。ただし、船は出来る限り痛めないこと。あの船に乗り換える」

早口でそうジエイに言い、ニヤリと笑う。

「了解。キャプテン」

ナミだけ話についていけず、二人が何をやるのか黙って見ていた。するとエースが右手を大きく引き、一気に放つ。

「火拳!!」

ドゴーン!!!!!!!!!!

その拳が炎に変わり、大きくなり、一気に海賊船は炎に包まれ吹き飛ばされる。

まさにそれは一瞬の出来事だった。

一瞬にして海賊達は何も出来ずにやられ、今は火から逃れようと皆、海に飛び込んでいる。

あまりの突然の出来事にナミは呆気にとられる。

その間にもう一つの船が近づいていた。ナミはそれに気づき、船を見るが不思議に思い、首を傾げる。

(静かすぎる)

「キャ!」

そう考えてるうちにナミはエースに抱えられその船に飛び移った。

そしてその船の中を見ると、

「あ、ありえない……」

「さすがだ」

そこにはさっきまで小舟にいたはずのジェイが真ん中にポツンと立っており、その周りには沢山の海賊達が倒れていた。

「やるじゃねエか、相棒」

「朝飯前ですよ。相棒」

そう言い合って、お互いニヤリと笑う。

「それより、アレはどうします？」

とジェイはあと一つ残っている海賊船に、僅か二人に一瞬で圧倒されたことに呆然と立ち尽くしているバルダを指差した。

「ん〜。波」

「えッ!？」

「あいよ」

ジェイはいつかの時みたいに手をバルダに向けて払う。

ザッパーン!!

「うわッ!!!」

ジェイが作った大きな波が海賊船を横から襲い、その衝撃でポトとしていたバルダ達も海に落とされる。

スピード海賊団の初合戦は、二人が本気を出すまでもなく、呆気なく幕を閉じた。

もうすでに日はだいぶ傾き、快晴の空の西の端っこに、申し訳ない程度にあった雲が、太陽を隠そうとしている。

「よし。今のうちに振り切るか。早くアローンと戦いてエからな。おい!!お前ら寝てないで働け!!」

「へ、へい!!」

逃げ後れてこの船に残っている何人かの海賊達を蹴り起こし強制的に働かせる。

だんだんと旋回し元の方角に合わせる。

向かう先はもちろんアロンパーク。ゆっくりと方向が変わる船を、ナミは先程の驚きから我を忘れ、眺めているだけになってしまった。

「で、どうでした？」

不意にジェイは、座りこんでるナミの顔まで屈んで尋ねる。

その問いに一度ジェイに視線を合わせるが、すぐに顔を下に向け、ギョツと手を握り閉める。

「……強い、強いよ。でも……、でもッ!」

確かに二人は強いが、今まで直に感じていたアーロンの恐ろしさの方が勝り、涙を流しながら必死に止めようとする。

微かに震える声の返事にジェイは落ち着かせるように笑い、ナミの頭に手を置く。

「残念ですが、私達は止まる気はありません」

その言葉に説得は無理だと悟る。

「よく一人で頑張ったね。でももう大丈夫です。……悪夢は私達が終わらせますから」

そう優しく言い、ジェイは立ち去った。

もう夕方の空をナミは見続ける。

西の空にはぐちゃぐちゃに混ざり合った雲。その雲に太陽は隠されており、冷たい風が吹いている。

不意に風が止み、その雲を刺すように、間から太陽の暖かい光が差し込む。

その光はナミを包み、握りしめていた手も緩み、ずっとあった体

の震えが、いつの間にか消えていた。

第五話 『実力』（後書き）

読んでくださってありがとうございます。  
かっぱ巻きです。

『ミズミズの実』について、なにかいろいろと無理があると感じられるかも知れません。

しかし、そこはどうか目をつぶって頂きたいのです。

私がこれを選んだのはその無理があるからこそ原作で使われる事はないと考えたからなのです。

ですから、すみませんがここは少し大目に見てください。

第六話 『対決』 (前書き)

2011年 2月1日。  
編集しました。

## 第六話 『対決』

朝焼けに空が染まり始めている。

東から昇る太陽は、いろいろなモノを”それぞれの夢”から目覚めさせる。

そんな柔らかな、しかし力強く、そして温かなその光が、木々の間を縫ってある村の外れの民家に差し込む。

そしてその民家の住人も、珍しくカーテンをしなかった窓からその光を直接浴び、夢から目覚めた。

「ふわあゝあ」

布団の上で目を擦りながら伸びをする女性。

(のど乾いた)

ムクつと起き上がり、まだひんやりと冷たい床をヒタヒタと裸足のまま歩き居間に出る。

そこには、2つあるうちの1つの椅子に座り、四角いテーブルに突っ伏して寝ているナミの姿があった。

「全くこの子たら…」

それを見てノジコは小さくため息をつき、自分がさっきまで使っていた毛布を持ってきて、ナミに被せる。

そして自分は反対にあるもう一つの椅子に座る。

「ううん」

少しナミが可愛らしい唸り声を出して顔を腕に乗せる。起きたか？と思ったがまだ寝てるようだ。

「ふふふ。なんて幸せそうな顔して寝てるんだい」

ナミの柔らかい髪をくるくるといじりながらノジコは微笑む。

「そう言えばあたしも珍しく良い夢を見たよ」

そうノジコが言うと返事をするかのようにナミが寝ながら笑う。

「なんでかな。なんでかわからないけどあんと同じ夢のような気がする」

そう言ってノジコはナミと同じように机に突っ伏した。

所変わって、ここはアーロンパーク。

その入り口の前に赤いハットに黒いパンツ履いた男、エースが立っている。

ドゴオオンー！

「ご丁寧にも入り口を殴り壊し開ける。

「お邪魔します!!!」

そして丁寧にペコリとお辞儀し、一歩足を踏れ相手を待つ。

「チュツ、誰だテメエ!!!」

するとアローン一味幹部のキスの魚人チュウを先頭に、ぞろぞろと沢山の魚人達が出てくる。

そして入り口を破壊したエースを見て怒り、武器を構え、睨みつける。

(な、なんだコイツ…)

それに全く動じず、ただ佇んでいるエースを見て、チュウ達は少し今までの敵とは違う違和感を覚え、自然と武器を持つ手に力が入る。

「ッ!!!」

いきなりエースの腕が上がり、チュウは身構える。

そのままエースの腕はハットに行き、

「オレの名はエース。以後よろしく」

「「「ああ。」」」丁寧にも。」「」

ペコリと軽くお辞儀をする。それにつられる魚人達。

(はッ！！しまった。乗せられた)

「チュツ！！お前らこいつは敵だ！！乗せられるな！！」

「な、なんだと！？」

「騙された！！」

「なんて悪いやつだ」

いち早く復活したチュウが、みんなを正気に戻す。

さつきよりさらに魚人達の目付きが鋭くなり、エースを射抜く。

「チュツ。お、おい！！テメエ何しに来た！！」

それでも全く下を向いたまま動じないエースにビビりながらも必死に虚勢をはるチュウ。

「おい！！聞ってるのか！！」

さつきよりさらに声を張り上げるが、ピクリとも動かない。

「ッ！！」

またしても、いきなりにエースは顔上げ、それに反応し魚人達は身構える。

視線がチュウとぶつかる。

(来る！！！)

チュウがそう感じた瞬間

「しまった。寝てた」

「『寝てたのかよ！！！』」

「なんだ。お前からコントでもやってるのか？」

「『してネエわ！！』」

「チュツ！！舐めてやがる！！」

チュウ戦闘態勢に入り、エースに攻撃を仕掛けに行く。

しかし先に今度はエースが尋ねた。

「この中にアロンはいるか？」

「チュツ。テメエなんかアロンさんが手を出す間でもネエ」

即答し、チュウがエースの目の前に来た瞬間

「そうか、いないか。じゃあジェイ、よろしく」

チュウや魚人達の間を一陣の風が通り抜ける。  
そして

「チュツ！！」

「うおッ!!」  
「ぐはッ!!」

ある者は突然血を吐き、ある者はいつの間にかある傷口から血を流し、その場にいたエース以外全員が、倒れていった。

そして魚人達の一番後ろには、真っ黒なコートに身を包んだジェイが静かに立っていた。

存在をずっと消し、姿を見られることなく、相手にやられたことさえわからせないまま倒す。そして皆が倒れた中に風に銀髪とコートを揺らし佇む姿は、まさに”暗殺者”そのものであった。

「お前、存在感ねエな」

「今は消してるだけです」

「いや、いつもねエ」

「……え!?!」

そんな雰囲気を台無しにする程ガーンと落ち込み出すジェイと、その姿を見てあまりにもシユールで笑い出すエース。

しかし、それも新たな敵が出てきて止まる。

まるでノコギリのような鼻に立派な背鰭。背丈は軽く2人を越え、腕は筋肉により丸太のように太い。この男こそがサメの魚人”ノコギリのアーロン”である。

そして今、その巨大が怒りにより震えている。

「貴様ら下等種族が同胞達に何をした!!!」

「攻撃」

アーロンの怒りの雄叫びをさらりと返したエースに、さらにアーロンの怒りが倍増する。

そしてこの言葉より第二ラウンドが開始された。

「殺す!!!」

ノコギリ鼻を前に突き出し飛び込んでくる。エースはそれを横に跳びかわす。そのままアーロンは壁に突っ込み、壁が粉々に壊れる。

「コイツがアーロンだな。じゃあ残りは任せた」

振り返らずにジェイにそう言ってアーロンが来るのを待つ。

「任せました。そして」

そう言ってジェイは残りの二人を見る。

アーロン―味幹部エイの魚人”クロオビ”とタコの魚人”ハチ”。

二人は同じ幹部のチュウがやられ、復讐心に燃えて対峙した。

しかし

その炎はすぐに消されることとなった。

対峙した瞬間に、いや、対峙しなければわからないこの逃げる事も出来なくなるプレッシャー。頭の中で鳴り響く警報。

(少しでも動いた瞬間に切り刻まれる)

2人の顔色は真っ青、尋常ではない程の汗。

これならば、気づかぬ間にやられた仲間達の方が随分と幸せだっただろうに。

思わず数秒前の自分を呪ってしまう。

そして

「終わりました」

その冷たい声を聞いて戦慄し、ガクガクと震え、動けなくなった。

それは何故か。

理由は簡単。その声自分達の後ろから聞こえたからである。

ポツン

恐怖に震える2人は地面に何か落ちたのに気づく。

そつと下を見る。

(おれの……血?)

バタン

2人の視界は真っ暗になった。

「ハチヤクロオビまでも……」

壊れた壁から出てきたアロンは、またもや幹部がやられたことに怒りが頂点に達した。

「コロスコロスコロス!!」

目が完全にイッてしまった目になる。

「シャーク・オン・ダーツ!!!!」

ノコギリを前に突き出し凄まじい速さで地面と平行に、エースに突っ込んでくる。

「あまい!?!」

ドガン!?!?!

それを焦ることなくエースは右足を振り抜き、建物の中へ蹴り飛ばす。

さらにエースも追い討ちと言わんばかりに建物に突っ込む。

「シャーク・オン・トウース!?!」

それを待っていたかのようにエースが入ってきた瞬間に、アークンが噛みつくが、

「なに!?!」

ここで初めて気付く。エースが悪魔の実の能力者だということに。

「ぐはッ!?!」

しかし今さら気づいてももう遅い。

そのままエースはアークンを蹴り上げる。

「炎戒!?!」

ボワアアア

手を炎に体を一回転させる。エースの周りが炎に包まれる。温度が一気に上がる。

「火柱！！！！」

一気に上へ駆け上がる炎がアーンを飲み込み、二階を突き抜け三階、四階、さらに上へ上へと上がっていく。

ドガアアアーン！！！！

そして最後には、島全体まで鳴り響く轟音と共に、アーンの海賊旗までも飲み込んだ。

## この瞬間

約5年間この島に恐怖の悪夢を見させ続けたアーンパークが、一夜もとい、一朝にしてたった2人の海賊により、壊滅した。

そして、その轟音によって目覚め、『アーンの襲撃か』と家から飛び出たナミは、眠たい目を擦りながらアーンパークが燃え盛る火と立ち上る煙を見て、”悪夢”が終わったと理解し、涙ながらに村のみんなに伝え、それが島全体にまで伝わり、まるで島が目覚めたかのように島全体が揺れる程に歓喜するのであった。

東から昇る太陽はいろんなモノを目覚めさせる。

そしてどっちら今日は、”この身の悪夢”を目覚めさせたよつだ。

第七話 『新たな仲間』（前書き）

2011年 2月1日。  
編集しました。

## 第七話 『新たな仲間』

島は次の日も、また次の日も、今まで悪夢を見続けていた時間を取り戻すかのように、歓喜に揺れ続けていた。

あれから、島中の人々が煙を頼りにアロンパークに集い、事実を知り、誰彼構わず抱き合い喜び合った。

そこにエース達の手柄を横取りしようとネズミのような変な海軍大佐が来たが、ナミとエースがぶっ飛ばし、アロン達を片付けさせて強制的に帰さした。

それから島の人々はそれぞれの村に報告しに行き、島全土を上げて祭りを始めた。

それは数日も続き、今も、もう日はとっくに暮れているがその真っ最中である。

踊り、飲み、食い、音楽を奏で、その全ての人々の顔は、笑顔である。

「飲んでるか小僧」

「おお、風車のおっちゃん。この火の輪ぐぐれ」

「殺す気か!!」

「ああ、美しいお嬢さん。僕と踊って頂けませんか？」

「いや。俺と踊ってくれ」

「……………男です」

「「なッ!?!」」

…笑顔である。

そんな騒がしい村から少し外れ、さらに行儀よく並んでいるみかんの木達を抜け、海に見える開けた見晴らしの良い場所にでる。

その真ん中に、まるで海とみかんの木を見渡しているかのようなお墓がある。

そしてそのお墓の前に一人座っている少女、ナミがいた。

「終わったよ、ベルメールさん。5年もかかったけど、みんな…自由になれた」

その目には涙を浮かべているが、表情は満面の笑みである。

その笑顔を風が優しく撫でる。

「おっ、ナっちゃん」

「…ジェイ」

自分の名を呼ばれて振り向くと、そこには男と言ったのにしつこくダンスを誘う男達から逃げてきたジェイがいた。

そのままジェイはナミの横まで行き、同じように横に座る。

「……」

「……」

ナミは海を、ジェイは夜空を見ながらお互い喋らない時間が続く。

「……ありがとう」

顔を真つ赤に照れくさそうに、ナミが小さくポツリと呟く。

その言葉にジェイは一度驚きの表情でナミを見るが、すぐさま「ヤつく。」

「声が小さくて聞こえませんよ」

「……バカ」

そっぽを向いて言うナミにジェイは子供が新しいおもちゃを見つけたような顔になる。

(もうちよっとおちよくりましょつか)

「これで貸し2つですよ。さあお嬢ちゃんには何をしてもらいましょつか」

バシヤ

「くうー!!め、目が!!」

調子に乗ってそう言った瞬間、ナミは持っていた酒を容赦なくジエイの顔にぶっかけた。

「くー!!」

目に酒が入り、激痛に手で顔を覆う。

そのジエイにナミは「動かないで」と声をかける。

言われた通り動きを止めたジエイの顔に、ナミが近づく。

そしてナミは、そっと自分の唇とジエイの唇を重ねた。

ジエイの視界は目が痛みで開けれず真っ暗。

そんな中、夜風に冷えた顔に、唇だけ柔らかい感触と温もりを感じた。

その柔らかいモノは、少し酒臭く、しっとりとして、そして。

その温もりは、ほのかに暖かく、そして優しい。

(……キス……)

それと同時に頭に浮かんでくる黒い髪の少女。

『ちよつ、あんた。怪我どないしたん!？』

『へへー。気にしない、気にしない』

『ええねん。うちはもう充分満足しました』

『そやねー、うちの願いはジェイがうちの分まで外の世界を見てくれることかなー』

『ジェイ、うちの約束、忘れた、あかんよ?』

いつもなら気付いた瞬間にすぐ離れるはずなのだが、今回はしなかった。

いや、できなかった。

次々と矢継ぎ早に浮かんでは消え、また浮かんで消える、2年前の記憶によって。

2年前の記憶、いつもはそれと共に溢れ出す感情は悲しみと憎悪。だが今回はそれらが薄れていくような気がした。

閉じたまぶたから涙流れ落ちる。

それは、目に入った酒の所為なのかはわからない。

『んぢゃーさ、これからはこれが側におるよーってサインな』

(ありがとう)

ジェイの頭にそんな思いが浮かんだ。

そしてジェイは、今だけは友のその好意に浸り、その優しい、柔らかな温もりを、精一杯感じることにした。

甘く、けどイヤらしくない純粹なキス。

それは長く続いた。

もちろん時間的にもだが、それ以上に2人の周りだけ時間がゆっくりになっただかのように長く感じた。

それもナミが離れることで終わりを告げる。

ナミは顔を上気させ、トロンとした目をしている。

ジェイも珍しく顔を赤らめている。

唇が離れたただけでまだ至近距離。

その距離でナミが微笑む。

その表情を見て思わずドキッとするジェイ。

「これで貸しは”私に”一つ」

「今の3つ分!？」

「文句あんの？」

「いえ、これっぽっちもございません」

この会話で一瞬にして、いつも通りの2人の雰囲気に戻る。

「それじゃその貸しを今使っわ」

理不尽な、と思いつながらジェイはナミが真剣な顔をしているのに  
気づいて、気を引き締める。

「私を仲間に入れて」

強い意志ではっきりとナミはそう言った。

夜が明け、エースとジェイは今日出航しようと準備をしていた。

島の英雄が出航するとあって、島は騒がしい。

「海賊だあー！！海賊が来たぞー！！」

「何だって!?!」

騒がしさが一転し、音がなくなる。

「俺達が行こう」

「あいよ」

最初に音を発したのはエース。それに続くジエイ。

「わあああ！！頼むぜ兄ちゃん達！！」

2人を見た島の人達は、静まり返る前よりさらに大きな歓声を上げる。

「ふふつ。まるで英雄ですね」

「ああ。けど悪くねエな」

そう言って2人は笑い合いながら、浜辺に向かう。

そこには見たことのある海賊船が一隻、すでに停泊していた。そしてその船の前に30人くらいの若者達とその先頭に一人、周りから頭一つ二つ抜き出た男。

真つ黒な短髪、切れ長な目、無精髭をはやし2メートルは超えている長身。茶色のズボン、肩に黒い毛皮のコートを掛け、背中には太刀。前開きになっていてコートから覗くやや黒めの上半身は、作り物のように隆起した筋肉に、所々戦いの傷痕がバルダの今までの戦いの激しさを物語っている。

そんな佇まいと鋭く光る眼光は、まるで戦国時代を生き抜いた武将そのもの。

数日前に出会ったバルダ、その人である。

「何のようだ」

エースがそう言うと、突然バルダは太刀を抜きそれを地面に置く。そして勢い良く跪いた。

「わしの名は剛剣のダビデ・バルダ。貴殿の剣触つれれ、その強さに惚れ参じたしだい。この剛剣を、貴殿達の剣に加えてもらいたい」

渋く低い声ではっきりとそう述べると、後ろに立っていた若者達も一斉に跪く。

あまりにも突然の出来事に呆気にとられる2人。

だが次第にその表情も緩み、ジエイは微笑み、エースはニヤリと笑う。

「いいぜ。剛剣を俺のスピード海賊団の”キング”として迎え入れよう」

まだ頭を垂れるバルダにエースは高らかに宣言した。

それからバルダ達は立ち上がり、それぞれ自己紹介をし、がっつかりと握手する。

「この船をくれるのか？」

そう言ってエースは立派な船を見上げる。

船首には馬の顔、数日前までバルダのマークが描かれていたメイ  
ンマストの帆は、今何にも描かれていない。  
少し傷があるが木にはまだまだ艶が残っている。

「うむ。中古だがまだ乗り始めて新しい。元々使っていたから設備  
は一通り揃っているはずじゃ」

その言葉に満足げに頷く、エースとジェイ。

「じゃ、早速出航したいから、今から描くデザインを帆と旗に描い  
てくれ。その間に俺は船の中を見ておく」

「承知した」

早く中を見たくてうずうずしながらエースはそう言って、急いで  
船へ上がって行った。

それを見てジェイはあきれ笑う。

「あんたはガキですか」

エースの背に向かって一言放ち、バルダに向き直る。

「随分人数が減ったように感じるんですが」

「本当はわし一人だけで来る予定だったんじやがの、あいつらにど  
うしても付いて来るって言われての」

そう言って2人は海賊旗を描こうとしている男や青年、中には女

の子もいる集団に目を向ける。

バルダはそこそこのいい歳なのに団員の半分くらいが若者である。何故かというところ、バルダが帰る場所がなくなった孤児達を保護していたからだ。

賞金首になったのも子供達を守るためや襲ってくるのを返り討ちにしていたためであり、一般人を襲うことは決してなかった。

懸賞金の額はなにも実力だけではなく、自身の危険度を表す方が多い。

ゆえに、世間的に危険度が低いと評されているバルダの実力は、1700万ベリーという賞金以上と考えてよいのである。

そんなバルダがエースの元へ旅立つ時、付いて行かなかった者も、全員が大粒の涙を流しながらの別れだったという。

「おい！！ジエイ！！これはすげーぞ」

「あんたの目は太陽か」

思わずそうツッコミを入れてしまう程、目をキラキラさせエースは船から降りてくる。

「お前の好きな風呂と抱き枕も……ある……ぞ……」

エースが枕の『ら』を言った瞬間にジェイはその場から消える。

誰かの驚きの声が船から聞こえたから、どうやら船にいるみたいだ。

「やれやれ。まったく、アイツはガキだな」

と言い、困ったと呆れるエースに、

「2人ともじゃ」

小さくツツコむバルダ。

「まだ帆に描くのに時間かかりそうだな。その間に部隊を作るか」

そう言っつてエースは、砂浜に文字を書き出す。

「部隊とはなんじゃ？」

「オレらスピード海賊団だ。スピードには13枚プラス1枚のカードがある。だからその数の分だけ部隊を作る。1はもちろんオレ。2と10はそれぞれ3人ずつの部隊を作る。ジャックとクイーンは未定、キングはお前。そして副船長のジョーカーはジェイだ」

これはアーロンを倒した後に2人で話合っつて決めた。

ここでバルダはふと疑問に思っつていた点を尋ねた。

「ジェイの武器はなんじゃ？」

「あの黒いコートの中にいろんな種類の沢山の武器を隠しているのさ。なんとたって前の職業、”暗殺者”だからな」

「……ほお、裏の人間じゃったんか。なるほどの、この違和感はそれでじゃな」

合点したと言わんばかりに、腕を組み、片腕は顎を掻きながら、うんうんと頷いた。

「なんだ？その違和感ってのは？」

そのバルダの様子に首を傾げ、今度はエースが尋ねる。

「いや、の、アイツの前に立っても、アイツの気配が全く感じられんのだ」

その言葉にさらに首を傾げる。

「そうか？確かに薄いけど、普通にわかるぞ」

「……それはそれでまたおかしいんじゃないが」

（わしが衰えたんじゃないか。それとも、この二人が異常なんじゃないか……）

自分が感じたものの、エースが感じたものに違いを感じ、しばらく考察する。

（ふっ、わしがなぜか惹かれたんじゃない。恐らく後者じゃない）

自身の顎をさすりながら、自分の中でそう結論付ける。

「しっかし、お前エ年の割りに喋り方爺だな」

「やつかましいわっ！！」

そう遠慮なく気にしていることを言われ思わず反応し、それを見てエースがまたケラケラ笑う。

その顔に少し毒気を削がれ、フンと鼻を鳴らしエースが砂浜に書いた文字を眺める。

- A：船長”ポルトガス・D・エース”
- 2：戦闘部隊
- 3：戦闘部隊
- 4：戦闘部隊
- 5：戦闘部隊
- 6：戦闘部隊
- 7：狙撃部隊
- 8：特殊部隊
- 9：航海部隊
- 10：医療部隊
- 11：ジャック”未定”
- 12：クイーン”未定”
- 13：キング”タビデ・バルダ”
- ジョーカー：副船長”ニコ・ジェイ”

バルダにそれぞれの得意なモノや特徴を聞き振り分ける作業が終わり、エースは一息つく。

「おっ。出来たみたいだな」

そして船を見ると、もう作業が終了していた。

一番手間の大きな真っ黒い帆には、スピードをバツクに炎のハットをかぶったジョリー・ロジャーのマーク。そして奥の一番高い帆には大きく『SPADE』の文字。

スピード海賊団『海賊船フレイムホース号』の完成である。

「完璧ですね」

いつの間にか白い枕を幸せそうに両手抱きしめながら隣にいたジエイがエースに言う。

「ああ」

それにエースが返す。

そして大きく息を吸い込む。

「野郎ども!!!出航だ!!!」

「「「おっ!!!」」」

天気は晴天、風は北東、絶好の航海日和。

そんな天気と島からの歓声が追い風となり、海の上を滑るように潮煙を上げながら海賊船は進んでいる。

「いい島だったな。」

「そうでしたね」

船橋からさつきまでいた島を眺める2人。

「結局ナミは来なかったな」

「ええ」

潮風で顔に張り付いた髪を耳にかけるジェイ。  
そこでエースはあることに気づいた。

「あれ？お前、いつも耳に付けてる黄色のピアスは？」

さつきまで海賊船があった浜辺では、そろそろ船が見えなくなりほとんど人達が家に帰り始めていた。

そんな中に全く動かない親子のような3人がいた。

「あれ？ナミ。あんたいつもそんな黄色いピアスしてたっけ？」

浜風にたなびくオレンジ色の髪の間から、見たことのある黄色いピアスがキラリと光っている。

「これは私の大切な人からの預かり物なの。次会う時にはアイツを驚かせてやるんだから」

そう言ってるナミの幸せそうな顔を見て、思わず微笑むノジコ。

「まさか海賊に助けられるとはな」

「あれ？ゲンさん風車は？」

「フフ…もう必要あるまい」

風車を付けていた理由を思い出し、笑い出すゲンさん。  
変なの、と言いながらそれにつられて笑い出すノジコとナミ。

そう、もう必要ない。本当の笑顔を取り戻したのだから。

「麦わら帽子の変わった男ってどんな奴なんだろ？」

この島の人達の人生はこれから始まる。

「あ。ナミにあなたの弟を勧めとききましたよ」

「ルフィを？……大切な金を勝手に寝に使ってナミに怒られるルフ

「イの姿が見える」

「あなたと一緒にですね」

「……」

「金、大分減ってるんですが……何故でしょう」

「し、知らネエ……」

「……」

ゴツーン

「いてええええ!!」

## 第七話 『新たな仲間』（後書き）

読んでくださってありがとうございます。かっぱ巻きです。

アロンパーク編終了です。疲れましたー。

今回が今までで一番書いていてしんどかったですー。今回の話は3種類パターンがあつたのですが、この3種類の良いと思つた所を合わせた結果、全体的ぐちゃつとなつてしまつた気がして不安です。

恋愛難しいです。作者様に恋愛シーンのコツを是非とも教えて頂きたいです。

……はい。そうですね。その前にまず自身の日本語を見直さないといけませんね。すみません。

ナミが仲間に入ること期待した方、仲間になつたのが謎のおっさんで申し訳ありません！！

ジエイの武器についての質問がありました。今回『双剣』と出ましたが、これは某モンスターを狩るゲームに出てくるものと同じような物と判断してもらつて構いません。

本格的な説明、”静”の型はおそらく次話かその次くらいには出ると思います。

これからますますしくお願いいたします。

第八話 『ローグタウン』 (前書き)

2011年 2月1日。  
編集しました。

## 第八話 『ローグタウン』

”東の海”のグランドラインの入口の近くに、とある島がある。

島の名前は『ローグタウン』。

別名”始まりと終わりの町”

かつての海賊王”ゴールド・ロジャー”が生まれ、そして処刑された町である。

そんな海賊時代発祥の地といえるこの島では、ある時期から僅か一隻も海賊をこの島から出航させていない。

そのある時期とは一人の海兵がこの地に配属になった時期である。

「大佐!!!スモーカー大佐!!!」

その海兵の名は海軍本部大佐”白猫のスモーカー”

ジャケットを着、背中には海楼石が埋め込まれた十手。2本の葉巻を口にくわえ、持っていた紙に向けていた視線を、ノックなしに部屋に飛び込んで来た海兵に向ける。

その獲物を狙う野獣のような目つきは、目が合うだけで入ってきた海兵を縮みあがらせた。

「ッ！！報告します！！町の西口の近くで二等兵5名が負傷しているのを発見しました！！そして海賊船が西の港のに停泊しているとの通報が入りました！！先程手配されたばかりの海賊の海賊旗かと思われます！！」

そう聞くとスモーカーの目つきはさらに鋭くなり、紙を机に置き、煙臭い部屋を跡にする。

その机の上に置かれた紙、手配書には、”火拳のエース”懸賞金3000万ベリーの文字とエースの写真が載っていた。

スモーカーが海軍本部派出所を出るとそこにはちょうど、小さな女の子と女か男かわからない全身を覆う白いコートに銀髪の人と鉢合わせになった。

女の子はおそらく泣いていたのだろう目は赤く充血していて、しっかりともう一人の人の手を握っている。

「海兵さんですか？」

その女か男かわからない人は、また女か男かわからない声でスモーカーに尋ねる。

「…ああ。大佐のスモーカーだ」

その返事に少し驚くもすぐに良かった、と呟く。

「この子、お母さんとはぐれたみたいなんです。ここにこればこの子のお母さんもいるかも知れな

「お母さん!!」

「マナ!!」

「つていましたね。良かったです」

話てる途中で女の子は、派出所の中に大好きな母親が居るのを見  
つけ飛び付き、再会を果たした。

そして二人は娘から話を聞いて、恩人に向かって頭を下げる。

「お姉ちゃん、ありがとう!!」

可愛らしい声で元気に言う女の子に、スモーカーと恩人の顔が緩  
む。

「ええっと…まあいいや。今度はお母さんの手を離しちゃダメだよ  
?」

「うん!!」

「本当にありがとうございます。何かお礼を」

「お礼はマナちゃんの写真で十分貰いました」

母親が何かお礼をしようとするのを、恩人はやんわりと断る。

「お姉ちゃんバイバイ!!」

その声にバイバイと恩人も返し、最後に母親がもう一度礼をし、二人は今度はしっかりと手を繋ぎ去っていった。

「悪いな。助かった」

「いえいえ。ただ案内しただけですから」

和やかな空気の中スモーカーの言葉にそう言って恩人、ジエイはそそくさと立ち去ろうとするが、

「ちょっと待ちな」

スモーカーの声にそれは失敗に終わる。

「足音や服の擦れる音、お前に関する全てが無音。気配も無し。そして何より、俺の勘がお前を危険だと告げている。……お前は何者だ？」

その詰問口調でストレートに言った質問に、空気が一瞬にして張り詰める。

人は慣れる生き物である。

長い期間し続けた事は、習慣になってしまい、逆に無意識にしていまうものだ。

それがスモーカーの場合は”人の観察”、ジエイの場合は”気配を消す”という行為であったのだ。

まあジエイの場合悪魔の実のせいでもあるのだが、無意識にしていたのである。

そしてそのジエイの気配の無さを瞬時に見抜くスモーカーは、流

石本部の大佐と言ったところだろう。

「……ただの旅人ですよ」

ジェイはそのスモーカーに内心焦りながらもそれを隠し、振り向きもせずに返事をし、また歩き出す。

その後ろ姿をジッと見続けるスモーカー。

「スモーカー大佐？」

後ろに控えていた海兵がなかなか動かないスモーカーに声をかけるが、それには反応せずスモーカーは海兵に向かって言う。

「アイツをしつかり覚えておけ。そしてもしアイツが海賊だとわかったら、真っ先に俺に連絡をいれろ」

そしてスモーカーはジェイとは逆へ歩き出した。

時を少しさかのぼる。

スピード海賊団はグランドラインに向けて食糧などの補給をするためにこの島に立ち寄った。

そしてローグタウンの人が沢山いる大通りを正反対の二人が歩いている。

黒短髪に半裸の男と銀長髪に全身を覆う真っ白なコートの男。

「なんでオレがたかが枕の買い物に付き合わないとダメなんだよ」  
些か機嫌の悪いエースと

「あんたが私の枕を燃やしたからですよ」

その不満げな顔をジッと見るジエイである。  
その視線を受けて、顔を背け口笛を吹く。

事件は昨日の夜に起こった。

エースはジエイの大好きな枕を勝手に使い、何の夢を見たのか、  
寝ながら

「爺いいいい！！！！」

と叫び、燃やしてしまったのだ。

どうやら今日は、エースはその罰として荷物運びをさせられてい  
るようである。

あっそうだ、と自分が不利になったから話題を逸らす。

「今日のコートは真っ白なんだな。何色あるんだ？」

「5色ほどありますよ。まず黒、白」

指を折りながらジエイは答える。

「あとは、ブラックにダークに真っ黒」  
「全部黒じゃねえか」

罰とは言いながら、何気にエースも楽しそうである。

「あれがあ有名な処刑台ですか」

「……」

暫く買い物をし、2人は中央広場に来ていた。

そしてそこには、あの有名な海賊王を処刑した台が、20年近く経つ今でも当時のままそこにあった。

海賊王、それはつまりエースの父でもある。

ジエイは処刑を睨みつけているエースを、盗み見ながら話す。

「今からちよつと10分ぐらい離れますが、ここで待っていてくださいね。絶対にさつきみたいに喧嘩をしないでください」

「……」

エースは真つ直ぐジツと処刑台を見続けた。

不意に口開く。

「……ジエイ。お前はオレがいねエと困るか？」

「……え？」

いつもと違う雰囲気戸惑いの声を上げるも、それを無視し溢れ

出すように言葉を紡ぐ。

「お前はオレが居れば辛くねエか？オレが居れば楽しいか？……お前はオレに生きてて欲しいか？」

「……当然ですよ」

回答に、そうかと呟く。

「お前はもし”鬼”に息子が居たら……どうする？」

どこかで女の子の泣き声が聴こえる。

「”鬼の子”ですか……。是非会いたいですね。だって私は”鬼”の右腕、シルバース・レイリーの息子ですから」

「……えッ！？」

その言葉に驚き横を見るが、そこにジェイは居らず、ちょっと離れた所で泣いている女の子に話しかけていた。

そして女の子と手を繋ぎ、一緒に歩いて行った。

「ジェイが”冥王”の息子？」

その場に驚き佇んだまま、エースは一人呟く。



案外、エースの死は”いい相棒”によってもたらされるかも知れない。

「まあとりあえず帰る……」

周りの人が1メートル以上距離を空けるほど不気味な笑いを止め、帰ろうとしたジェイがまた立ち止まる。

「……」

そして目を閉じる。

### 『ミズミズの実』

この能力は見た目は地味である。だがそれがまたこの実の利点である。

”水という概念”を広げる。概念だけであるが故に誰も気づかない。

水の上を歩くと波が起こるように、人々の動きに合わせて”ミズ”も波を起こす。

そして研ぎ澄まされた感覚と、自身が”ミズ”であるジェイにしかわからない情報を得ることができる。

それは手の動きであったり足の動き、場合によっては、舌や眼球、顔の筋肉の動きまでもわかってしまう。

つまり、

(17人、うち10人が海軍。やはりスモーカーに出会ったのはま  
ずかったですね)

ジェイに監視などの行為は全くの逆効果であるということだ。

(…なるほど。海軍はスモーカーの指示により監視。あとの7人は  
さっき潰した海賊の仲間か)

「……まあスモーカーが居ないならいいか」

とちよつと考えて一度、屋台の串カツ屋に立ち寄り、10本買っ  
てまた歩き出す。

串カツを全て食べ終わる頃には町の西口を出ていた。

それを見計らつてか、剣を持った男が一人ジェイの前に現れる。

「げへへ。俺達はさっきお嬢ちゃんの彼氏が挨拶してくれた仲間な  
んだ」

小汚い格好に見るだけで寒気がするガマガエルのような顔。そし  
てそこに厭らしい笑顔を貼り付けて、コートの中を想像するしなが  
らジェイを舐めるように見る。

だが、俺”達”と言つた割には一人しかいない。

それに気づき男はイラつきながら周りに居るはずの仲間を呼ぶ。

「おい！！お前らさっさと出て来い！！」

反応はなし。それに可笑しいなと呟くがまた厭らしく気持ち悪く、寒気吐き気脱力恐怖感が起こるような笑いを浮かべる。

「ゲヘヘ。まあいい、このめったにいない上玉を独り占め出来るぜ」

そう言ってジェイに脅すよに剣を向ける。

ジェイの顔は依然として無機質で仮面のように動かない。

男は、そうだと言い懐から紙を出す。

「ゲヘヘ、お嬢ちゃん。あんたの彼氏、実は賞金首なんだぜ」

それは、男がさっき手に入れた新しい賞金首リストの中の一枚。

エースの手配書である。

それを見て初めてジェイ表情が動いた。

一瞬驚き次に怒りの表情に。

「ゲヘヘ、可哀想に騙されたんだな。俺が体で慰めて」

「最後の最後にやってくれましたね。さっさと来てください。ガマガエル」

ジェイの両手にはいつの間にか双剣が握られていた。

それは漆黒なのに怪しく輝く剣。

名を双剣”夜光”。

元は1つの剣だったのだが、ジェイが過去に綺麗に真っ二つに折れて、捨てられていたのを発見し、それを再び双剣として作り出し

たものである。

真つ白の姿にそれを両手に持ち佇む姿はどこか神秘的な姿であった。

「ガガガ、ガマガエルだど！！！！このアマ、死ね！！！」

ゲコおおお！！と叫びながら見た目とは裏腹に素早くジエイに突っ込む。

交差する瞬間に数本光の筋が走る。

「ゲゴツ！！！」

そしてそのままガマガエル男は、ジエイを一步も動かせることも出来ず、両手足から血を流しながら倒れていった。

常人にははなかなかのスピードと剣の腕だったが、所詮は常人であり、常人を越えたジエイを相手には当然の結果である。

「ああ〜ガマガエルのせいでバレちゃったじゃないですか」

そうガマガエルに言うジエイの後ろには銃を構えて綺麗に列び始めた海兵達。

「逃げるが勝ち」

「あつ！！待てー！！！」

それを待たずして走り出すジエイは、なかなかの残忍な人なのではないだろうか。

「くそツ！おい！！大佐には連絡できたか！？」

「そ、それが子電伝虫4匹ともが麻痺してるんです」

「なに！？」

「軍曹！！」

「今度は何だ！！」

「倒れている男と思われる仲間6名が倒れているのを発見しました。全員毒によって麻痺しているようです」

余談であるが、その男達の首にも、4匹の電伝虫達にも、それぞれに同じ見たことのある串が刺さっていたという。

西口と港の丁度真ん中くらいに可笑しな光景が広がっていた。

色で表すなら、赤と白。具体的になら火と煙。

本来なら同じ場面で見えるが、今はその二色が絡み合いながらも決して混じらず、お互いを反発しあっている。

一旦両方が弱まる。

そこからそれぞれの中央が見えてきた。白の中央にはスモーカー、赤の中央にはエース。

「なるほど。確かに”火拳”だな」

「だろ？ 3000万は安すぎとは思わねエかえ？」

「抜かせッ」

再び、火と煙がぶつかる。

このロギアの能力者同士の終わりの見えない戦いに、一つの転機が訪れる。

「やっと追いつきました」

いつの間にかエースの横に現れたジエイ。

その登場によりスモーカーの顔が険しくなる。

「やっぱりか。お前には見張りを付けたはずなんだが？」

「さあどうでしょうね」

さらにスモーカーの目つきが鋭くなる。ジエイの手にも夜光が握られていた。

佇む姿はガマガエルの時と同じ。だがスモーカーは気付く。  
常人を越える強者だから感じることのできる、目の前にいるのに  
そこに気配を感じないこの異常さ。

「…………お前は何者だ？」

その異常さに、ジエイが答えることはないとわかっていながら、  
再び同じ質問をしてしまう。

だが、” 答えを得られない ” というスモーカーの予想は覆される。

「コイツはオレの副船長のジエイだ。よろしく頼む」

清々しく胸を張りながらはつきりと言ったエースによって。

「…こ、こ、こんのバカ！！！！」

ゴッーン！！

「いてええええええ！！！！！！！！！！」

その叫び声は今までで最高級である。

「なんで勝手にばらすんですか！！」

「人が尋ねた事には答えるのが常識だ！！」

「食べてる途中に寝るバカが常識を語らないでください！！」

「人が寝てる時に殴って起こす奴にバカと呼ばれたくねエ！！」

「その寝る行為が悪いこととわかってないからバカなんです！！」

わーわーと言い争う二人を呆然と見ていたスモーカーの額にだんだんと怒りマークが増えていく。

そしてついに

「やかましい！！！！ホワイトブロー！！！！！！」

「わッ！！！！」

「ぐッ！！！！」

煙の火山が大噴火を起こし、煙の拳が二人を吹き飛ばす。

「くッ、話の続きは船の上でしましょう」

「ああ、とりあえず逃げるぞ」

そして二人は勢いよく踵を返し逃げ出す。

「俺が逃がすと思ったか！！！！」

スモーカーが煙となり二人に迫るが、不意にジェイが振り返り蹴りを放つ。

「ガハッ！！！！」

その蹴りは、当たらないと思ってそのまま無視して突っ込んだスモーカーの顔に綺麗に決まり、巨大を吹き飛ばす。

なんとか受け身を取り、すぐ起き上がるが、顔は戸惑いの色を隠せずにいる。

「なぜ煙の俺に蹴りが入った!？」

「ふふ、そんなの教え

「ジエイは全ての悪魔の実の天敵だからな」

「バカ!!!!!!」

まるで子供が自分のおもちゃを自慢するかのように惜しげもなく言うエースに、ジエイの怒りは再沸する。

そんな喧嘩をしながらも、二人の逃げ足は凄まじく速く、一度足を止めたスモーカーをあつという間に引き離していった。

「くそッ!!!逃げられた。ん?」

見失った後、西の港のハズレに行ったがすでにそこには海賊船はなく、地面に『あばよ、ケム男』の汚い文字と『タバコはほどほどにしましょう』の綺麗な文字が書かれているだけだった。

スモーカーはそれをしばらく見つめ、舌打ちしてから足で踏み消し、子電伝虫を取り出した。

『はい。こちらローグタウン派出所』

「俺だ。今から言う事をメモして本部へ伝える」

『た、大佐!!!わかりました』

「スピード海賊団船長”火拳のエース”はロギア的能力者であること、そしてその海賊の副船長なんだが、名前は”ジエイ”だがコイツは俺に蹴りを入れた。どうやら全ての悪魔の天敵らしい」

「大佐が蹴られたんですか!?!?」

「ああ。とりあえずその危険性を本部に伝えておけ」

「了解しました。それと大佐。いつも大佐についてくる”刀に詳しいメガネの娘”がまた海賊に捕まりました」

「またか。あの”トロ娘”はどれだけ俺に迷惑をかけるんだ」

そう最後にスモーカーは吐き捨てるように呟き、急いで町に戻るのであった。

一方、無事に全員が揃い、グランドラインに向けてローグタウンを出航したスピード海賊団は、

「なんで私の悪魔の実際の事を言っただんですか!?!」

「悪魔の実際の事は言ってねエ!?!天敵と言っただけだ!?!」

「それだけで悪魔の実際の事を言ったことになるですよバカ!?!」

「オカマ野郎にバカと言われたくねエ!!」

「オ、オカマー……!!!?!?」

「あれを見た昔の人は”喧嘩するほど仲がいい”という諺を作ったんじゃない」

「なるほど。バルダさんは教えるのが上手いですね」

「いや、見本が上手いんじゃない」

グランドラインに向けてテンションが高いのか、いつも以上に騒がしかった。

その騒がしさは夜気が迫るまで続いたようである。

## 第八話 『ローグタウン』（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

最近感想に感動したかっぱ巻きです。

いつの間にやらお気に入り件数が100を突破しました！！！！

私感動の涙で前が見えませぬ…。

本当にありがとうございます。

これからもよろしく願いいたします。

137

### 追記

NOSの全原作一覧の『ONE PIECE』をクリックしたら、  
前までは作品がいっぱいあったのに、今はなくなっているのは何故  
なのでしょう。

これは私だけなんでしょうか。

気になります。

第九話 『新たな旅立ち』 (前書き)

2011年 2月1日。  
編集しました。

## 第九話 『新たな旅立ち』

吹き付ける突風、暴れ狂う海、大空はどす黒い雲で覆われ、咆哮と共に雷光が走る。

その暗黒の中を、豪雨を受けながら、灯台の僅かな灯りに照らされて進む、一隻の海賊船。

「右にずれてきてます!!」

「大きな風が来ます!!」

「それは9番隊に伝える!!全戦闘部隊は急いで帆をたたため!!」ジエイは10時の津波を潰せ!!」

「了解!!」

只今、スピード海賊団は初の大時化おおしけに見舞われている。

ローグタウンを出航した一行は灯台から伸びる”導きの灯”を頼りにまっすぐにレッドラインにある運河の入り口に向かっていた。

その途中、航路を室内で話し合っていたところを突然の大嵐が襲ったのだ。

しかし、初とはスピード海賊団としてなだけで、個人個人は経験済み。

それと何よりもこの船、フレイムホース号の高い機動力。大抵の波はビクともせず針路を易々と変える事が出来る。

故に、サイクロンなどでないただ嵐など、へっちゃらである。

「進路修正確認しました!!」

9番隊から声が飛ぶ。

9番隊”航海部隊”

この部隊は、航海術と料理、この2つが出来る3名で構成されている。主な役割は当然、飯と航海プラス戦闘。

航海の時は基本的に、全員が9番隊の指示に従わないといけない。

いつしか”導きの灯”が消える。だが、一度わかっている方角を、航海術を持った者が間違える筈もなく、そのまま真っ直ぐに進んでいく。

すると見えて来るモノがある。

「な、なんて大きさだ」

高く聳える赤い壁。『レッドライン』。

その高さは雲を突き抜けて頂点が見えず、その長さは世界を一周する。

向き合えば、黒い雷雲の天井と相俟って、まるで薄気味悪い大きな監獄の中ようである。

”その壁”を目の前に圧倒されている団員。

しかしその中、二人だけが笑っている。

一方はびしょ濡れになるのも構わず船首部の馬の頭に半裸で座っ

ており、一方はフードをかぶり前部のデッキに佇んでいる。

その二人の表情に一切の不安の色はなく、有るのは自信と期待だけ。

何者にも屈しない己の力に対する自信と、この先の未知なる冒険に対する期待。

ただそれだけ。

エースは、ふと船のスピードが上がるのを風で感じる。

「なにか強い海流に乗ったぞ」

「これでいいんです。もうこの海流に乗ってしまうと後には引けません。……どうします？今なら私の能力で戻せますが？」

微笑みながら挑発するように尋ねたジェイの質問を、エースは鼻で笑う。

「早くオレをグランドラインに行かせろ」

「うわあ。もの凄く悪い顔。まあ大丈夫ですよ。ここからは、着くまでスピードは上がり続けますから」

そう言って前を見れば、レッドラインの一部である”リヴァースマウンテン”。

そして、それに目を凝らすと、山の頂上まで続いているであろう、一本の水のラインが見える。

あれこそが、”グランドライン”の入口である。

「8番隊」

ジェイが言うと、はっ、とその横に少年が現れる。

「9番隊に伝言。流れが一気に速くなるから、早めに入り口の方向に合わせなさい」

そしてまた、はっ、と言い消える。

8番隊”特殊部隊”

この部隊は、伝令や偵察が主な役割である。戦場においては、この部隊の働きによって、より円滑に戦術的な戦いを行うことが可能になる。

今はジェイ指導の下で暗殺術などを叩き込んでいる。

言うなれば、ジェイ直属の暗躍部隊のようなものである。

「うおッ！！」

「なッ！！」

「くッ！！」

急激に船のスピードが上がる。

それは緩むことなくどんどん上がり、一気に入口まで近づく。

もつ目の前には先程ギリギリ見えていた水のラインがはっきりと見える。

「……これは凄いな。確かに登ってる」

「ええ。知ってましたけど、生で見るのは初めてです」

”リヴァースマウンテン”。

”Mountain”、つまり山が”グランドライン”の入口となれる理由。

それは、水が海流の勢いのまま、山を駆け上がっているからなのである。

「……ついに来たな」

「……ええ」

高鳴る鼓動。沸き起こる興奮。

体の奥で何か疼きだし、全身が僅かに震える。

そして

「来た!!」

「うお!!」

一気に駆け上がる。

感じることは、水しぶきを浴びた冷たさ。心臓を置いて行ったような浮遊感。そしてその反対の抑えつけるような感覚。

視界は左右は赤い壁に遮られ、後ろはすでに身がすくむような高さの光景、前は近づいてくる雲。

「……………」

体の中で疼いていた興奮が開放され、言葉にならない叫び声をあげる。

「雲で前が見えないぞ!!」

「大丈夫です!!」

雲に入り、視界が一気になくなる。

「ここに入ればもうすぐ」片道が終わり」ます!!」

そして遂に雲を抜ける。その先には

「すげエ……………」

「……………」

丁度太陽が昇りだしたのか、空は薄明かりの中微かに星が見え、なにより見渡す限りの雲海。

それは、朝の優しい太陽を反射させながらも、雲の起伏で出来る影で、ゆっくりと波打ちキラキラ輝く、幻想的で神秘的な白い海。



「すげエー!!」

今までの静けさが、歓声の嵐に変わる。

それには誰一人として例外はおらず、皆の表情には登る前にあった不安や怯えなど一切ない。

監獄のような壁を越えたからなのか、絶景を見たからなのかはわからない。

だが完全に下りきる頃には、まるで生まれ変わったように強い自信と意志が現れている。

”リヴァースマウンテン”

”Rebirth”、つまり復活や更正。

この山の名前には、越える者に勇気を与え、強く立ち直させる意味もあるのかもしれない。

「野郎共!!これからが本番だ。世界を取るには、この未知なる海を制しなければならぬ。……だが心配するな。オレがお前らを世界に導いてやる。黙ってオレに着いて来い!!」

「「「おう!!!!キャプテン!!」」」

その冷めることのない興奮のまま、予定していた灯台には停泊せず、船を進める。

どこに着くかはわからない。知っているのはエースの腕にある口グポースが示す方向だけ。

「この先、どんな冒険が待っているのか……。」

強く生まれ変わったスピード海賊団の、新たな旅立ちである。

## 第一章【東の海編】『完』

「クシユン!!」

「ハハハ!! あの嵐で風邪引きやがった!!」

「うるさい!! なんでレインコートまで着た…クシユン!! ……私が風邪引いて、半裸だった…クシユン!! ……エースが元気なんですか!!」

「ハハハ!! オレは最強だからだな」

「昔の人はあれを見て『バカは風邪を引かない』という諺を作ったんじゃない」

「なるほど!! バルダさんの説明とてもわかりやすいです!!」

「……いや。お手本が完璧なだけじゃ……」



第十話 『ウォツカーアイランド』(前書き)

第二章

【ウォツカーアイランド編】

## 第十話 『ウォツカーアイランド』

風に揺れて擦れる草の音、雲に隠れることなく周りを照らす月とそれを祝うかのように響く虫達の鳴き声。

この島の港と森の間にあるちよつとした草原は、草の光沢で跳ね返った月の光によって、ちよつとしたステージになり、そこにいる虫の歌声によって、自然のコンサートが味わえる。

しかし一步森の中に足を踏み込めば、そこは月光届かぬ暗黒の世界。

その暗闇の森の中を黒い人影が走り抜ける。

裏の職業の証ともいえるその音のない完璧な足運びは、その者が相当な手練れということを表していた。

だがいくら音が無くても、野生の生物は匂いで餌を見つける。ましてや血を流していたのならなおのこと。

ザシユ

「くッ」

音もなく飛びかかってきた生物を一瞬遅れて切り捨てるが、無理に踏み込んだ衝撃で先程受けた傷が痛み、声が漏れる。

それでも男は、さらに森の奥へと、島の中央にある大きな木を指して走り続ける。

大きな木の周りには、日光が当たらないため何も生えてなく、見晴らしがいい。しかもここの生物はあまりそこには近寄らない。

だからひたすらそこへ走り続ける。

「ハア、ハア、ハア」

しばらく走り続け、やっと抜け出した時には、流石に息が切れ、肩も大きく上下していた。

「くツ」

男は一度敵が来ていないか確認した後に気が抜けたのか、思い出したように体の傷が痛みだし、近くにあった岩に腰を降ろす。

「くツ、痛えな。舐めてたな。これならあの馬鹿でかい額の報酬で当然だな」

そう呟き、何か妙な静けさに気味の悪さを感じながら傷の具合を確かめ出した男を、森から見つめる一匹の蜂がいた。

その蜂は男の様子をしばらく見つめ、大きな木に向かって飛び立つ。

どんどん高度を上げ、幹の上部になぜかある、小さい窓に入っていた。

その窓の先には人一人が充分に住めるくらいの空間があり、椅子やベッドなども置いてある。

そして蜂は部屋の壁に止まり、八の字に踊り出す。

それを見て動き出したのは一人の人間。

その人間は窓際に移動し、横に立て掛けてあったスナイパーライフルを構える。

スコープを覗き、引き金に指にかけ。

今宵の満月が綺麗な夜、珍しく静まり返った森が、何かを放った音を合図に、競い合うように動き出した。

ここに一つの島がある。

穏やかに一定のリズムで波打つ海は、島を囲むようにサンゴ礁が広がり、色鮮やかな魚が踊るよに泳いでいる。

空は雲一つなく、太陽が容赦なく照りつけ、この日差しと座っているだけで額に汗が浮かぶ程の気温は、まるで真夏。

そして、そんな栄養満点の日光を浴びてか、島全域にわたって広がるジャングル。

ただそのジャングルは普通ではない。

そこにあるのは”木”ではなく、緑や赤、黄など色とりどりの巨大な”野菜”。

そう、”野菜”である。

りんごの木のように実なるトマト、4メートルはあるアスパラガスやネギ。

それはまるで自分たちが小さくなったかのような気持ちに錯覚させるほど、奇妙な光景である。

そして一番奇妙なのは、いや、異常なのは島中央にそびえる、大きな大きなブロッコリー。

普通の木の、葉に当たる部分は、ちよつとでも光を無駄にしないかの如く緑でいっぱい、幹に当たる部分も、茶色ではなく薄い緑色をして、極めつけは独特なフォルム。

まさに“ブロッコリー”以外の言葉は当てはめることは出来ない。

そんな少々おかしい島の名前は“ウォッカーアイランド”。

グランドラインの七つあるルートの中の一つの、最初にぶち当たる島である。

この“ウォッカーアイランド”には国というものはなく、一つの港とそこに面してできた街が一つあるだけ。

港には、隠すこともせず堂々と並ぶ海賊船。

だが、この街の人達は海賊達に怯える様子はなく、逆に歓迎している。

なぜなら、グランドラインの最初の島ゆえに海賊達は皆、気分がよくなり、たんまりと金を落として行くからだ。

そんな昼間つからバカ騒ぎやら喧嘩やらが起きている港の一角に、船首に炎の馬がある、一隻の海賊船が停泊している。

スピード海賊団、フレイムホース号だ。

船の中は、この陽気な天気とは違い、陰気な雰囲気漂っている。みんなが甲板の上で疲れきったように、ぐてーと突っ伏している。

それも仕方ないのかもしれない。たった今一つ目の航海が終わったのだ。

嵐が来たと思えば吹雪に変わり、無風になったと思えば、大津波が起こる。

極めつけはサイクロン。これはジェイの能力のおかげでいち早く湿度の変化に気付き、難なく回避した。もし直撃していれば今はなかつたらう。

そんなグランドラインの洗礼とも言つべきものを受け、さっきこの島に辿り着いたのである。

「キャプテン。帰ったぜ」

ちよつと前に買い出しに行った数名が、酒場で大量の酒と水と食糧を買って帰ってきた。

そのうちの一人がエースに声をかけると、エースは立ち上がり、

「おう。お疲れさん。うっし、お前ら宴だあああ!!」

そのエースの声を合図に、さっきまでの陰気で疲れ果てた雰囲気とは打って変わり、それぞれが立ち上がり、喜びの雄叫びを上げる。

「お前ら酒は持ったな?それじゃー乾杯だ!!」

「「「かんぱーい!!」」」

そして、スピード海賊団グランドライン最初の大宴会が始まった。

「くツハあゝ、さすがグランドラインの酒だぜ」

「くくく、お前、その酒はイーストブルーの酒じゃねえかよ」

「おい!!それは俺の肉だ!!」

「残念ー、早い者勝ちだ。ハツハツハツ」

ドンチャン

ドンチャン!!

ドンチャン！……！  
ドンチャン！……！……！  
ドンチャン！……！……！……！

周囲の喧騒に負けなくらいにバカ騒ぎをしているスピード海賊団。

その中央にいて、一際騒いでいたエースは、視界の端に銀髪を見つ、近寄る。

「よお、飲んでるか？オカマ！！」

開口一番の罵声にジエイは、ぶうーッ！！と酒を吐き出した。

「ゴホッ……エース、酔ってますね？」

「はんッ。オレを酔わすには安すぎる酒だ」

「バカ、安いのしか飲んだことないでしょ」

軽く言葉を交わし、ジエイの横にドカッと座り、一緒に騒いでいる船員達を眺める。

「賑やかだな」

「船長がバカですからね」

仕返しとも言つべきジエイの罵声に、今度はエースが吹き出す。

「……お前エも酔ってるな？」

その問いには、赤みを帯びたジェイの頬が答えを示す。

「それで？ どうだった？」

ニヤニヤしながら言ったエースの質問に、今度は返事を返す。

「……宝が「お前ら！！この島宝があるぞ！！」

「おおおお！！」

「なんだと！？」

「どこだ！！今から行くぞ！！」

「話は最後まで聞いてください！！」

騒ぎを治めるのは無理だと判断し、エースだけでも聞く体制にさせる。

「いいですか。よく聞いてくださいねッ！！」

「お、おう」

「確かに、宝はあると聞きました。けどそれは最近の噂で、なんか怪しいんですよ」

着いてすぐにジェイは買い出し組と一緒にこの島について聞き込みに行っていたのだ。

そこで耳にした噂とは、

『この島にお宝が隠してある』  
これだけならよくある話なのだが、どうにもこうにも噂の立ち方が怪しいのだ。

何年も住んでいる酒場の主曰わく

『今まで、あるかないか、と聞かれたことはあったんだが、ここまではつきりと“ある”と断言した噂はごく最近だな』

雑貨屋のおばちゃん曰わく

『あゝ、またその噂かい？ 全くわからんねー。うちらだって何年も住んでるのに知ったの最近なんださー』

どこの店や客に聞いても、“ある”という噂があるだけで、その深い内容については誰も知らない。

唯一のわかっているのは、場所が中央の“巨大ブロッコリー”だということと、沢山の強者が探しに行ったが、誰一人無事に帰っては来なかったということだけである。

「なるほどねエ」

そう言って、グッとグラスに残っていた酒を一気に飲み干したエースを一瞥し、また話続ける。

「でもそれだけじゃないんですよ。もう一つ変な話があるんです」

そう、実はもう一つ変な話がある。

それは、宿屋のおばさんが教えてくれた話。

『その噂が始める少し前に、武装した集団がこの島に来たんだよ。気持ち悪いぐらいに統率が取れていたから、ありゃーどっかの国の

「軍団さ」

おばさんによると、その集団は森に入っていったんだが、半日もたたずして森にいる化け物達に襲われ逃げ帰ったらしい。

さらにおばさんは続けて言った。

『あたしが考えるにね、この森にその国の王さんを殺した犯罪者が逃げ込んだのさ。最近噂がたお宝つてもその犯罪者が盗んだ国宝なんさ』

「『おつかね、おつかね』、ってそのおばさんは言っていました」

「なんでモノマネ？」

「そつくりでしょ？」

「いや、本物知らねエし」

おばさんの声を完璧なモノマネをしながら言ったジェイに、呆れ顔で手を顔の前でブンブンふるエース。

「でどうします？」 国家” が関わっている話は、大概が厄介事ですよ」

そういう裏で生きてきたジェイだからこそ知っている、” 国家” というものの厄介さ。

例えば、手紙を盗むという仕事でも、任務完了後に国家機密を知ったとしてすぐに殺されそうになる。

仕事の内容は軽くても”国家”という単語が入るだけで、内容はもちろんのことその仕事の後も、いろいろ厄介事が待ち構えているものだ。

「ふ〜ん」

そんなジエイの心配を一蹴りする。

「ふ〜んて、真面目に考えてますか？」

「どうでもいい。国だか犯罪者だかなんだか知らねエが、俺の前に立ちはだかるなら容赦しねエ。それに」

酒を一気に飲み干し、ジエイを真っ直ぐ見る。

「俺達は海賊だからな」

エースの夜でも力強く光を放つ目をジエイも真っ直ぐ見返す。

辺りはすっかり月明かりが優しい真夜中。

あれだけ騒いでいたのにも関わらず、フレイムホース号の上では、爺臭い喋り方を理由に女性に振られた話を10代半ばの少年にするバルダや、高額の手配書を騒ぎながら男前順に並べ酒を飲む女性陣、とりあえず叫ぶ男達など、まだまだドンチャン騒ぎは収まりそうもない。

「く〜っ」

「ふふっ」

そんな中をしばらく続いた睨み合いは、不意にどちらかともなく笑うことで終わる。

そしてどちらとも小さい樽で出来たジョッキを持ち上げ。

「乾杯」

一気に飲み干した。

翌朝。

外で寝てたせいで冷えた体に、登りだした太陽の温かい光が心地よい。

いつものようにエースの「爺いい!!」という叫び声で目覚めたジェイは、とりあえずエースを蹴り飛ばし、まだ眠気の残る顔を海の冷たい水で洗う。

そのお陰でスッキリサツパリとしたジェイの気分とは逆に、船の上はズーンと沈んでいた。

「ううー」

「気持ち悪い」

「頭痛つた〜い」

予想通りの二日酔いである。

スピード海賊団のほとんどのクルーがこの状態な事に呆れ、苦笑いを零す。

「すまんの、こいつら酒が入ると少々羽目を外しすぎるんじゃない」

元自分の部下達のだらしない姿に責任を感じたのか、バルダがジエイに歩み寄り苦笑いを浮かべる。

「まあ、初めてのグランドラインの航海だから、これくらいはいいんじゃないですか。エースが言うには昨日程度の騒ぎでは、全然足りなくらいだそうですね」

その言葉に今度はキャプテンに対して苦笑いが浮かぶ。

だがその苦笑いも、今にも吐きそうな男を見付けすぐに担ぎ上げ、口を船の外に向けさすバルダ。

ジエイも他のクルーを背中をさする。

「10番隊、この病人達を頼みますね」

「はいッ」

そう言ったジエイに元気よく返事を返した10番隊のツインテールの女の子。水と少しの薬をせっせっせと運んでいる。

「10番隊”医療部隊”」

この部隊は名前の通り医療専門である。そして全員が非戦闘員。どんな戦闘においても、まず自分が怪我をしないことが絶対である。

「さあ、行くか」

そんな所へ、鞆を肩に掛けたエースがデッキに現れ、船から飛び降り、それを見たジエイも船から降りる。

「よし。じゃーバルダ、船とバカ共は任せた。夕方くらいに帰る」

「うむ。任された」

「帰る間に爺クセ喋り方治せよ」

「治るかっ。バカもんっ」

そう冗談を飛ばして笑い、ジエイとエースの2人は森へと歩き出した。

その様子を見ていたツインテールの女の子は首を傾げ、バルダに尋ねる。

「二人はどこ行くの？」

「あの巨大ブロッコリーに宝を探しに行ったんじゃ」

それを聞くと、ちよっと口を尖らせる。

「いいな、私も冒険したいな」

そんな女の子の様子にバルダは少し笑い、温かい目を向ける。

「そうじゃの、じゃが今回は止めた方がええの」

「どつして？」

またまた首を傾げる女の子にバルダは森を見なさいと、促した。

森を見るとちょうど森へ向かうカモメが一匹。

そのカモメは一際高いネギとほうれん草の間を通ろうとしたが、いきなり動かなくなった。

それを不思議に思いさらに食い入るように見る女の子とちよつと回復した病人達。

だが次の瞬間、そのカモメは、8本もある黒い足をカサカサと素早く動かし空中を歩く、カモメの2倍ある大きさの、見るだけで身の毛もよだつ気持ち悪いクモに食べられてしまった。

「……………」

そのあまりにもショッキングな光景に一同固まり、ちよつと治つたはずの病人達は吐き気をぶり返し、女の子は心の中でジエイとエースに尊敬の念を覚えるていた。

「この島の最上級にいる生物は、野菜と共に大きくなった虫達なんじゃ」

さらに悪化した病人達を見て、バルダは呆れた苦笑いを浮かべる。

本日も快晴。海から吹く風はちよぴり冷たく、それが気持ち良い。どこかのんびりとした空気が流れるフレームホース号。

そんな船のマスト上から一匹の蜂が、巨大ブロッコリーに向かって飛び立った。

第十話 『ウォツカーアイランド』（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

どうも。お久しぶりで申し訳ありません。

かっぱ巻きです。

とりあえずセンターが終わったので休憩がてら更新しました。

しばらくはオリジナルストーリーが続きます。

ではこれからもよろしくお願いします。

## 第十一話 『野菜の森』

「火拳！！」

エースの勢い良く突き出した拳が炎に変わり、上から飛びかかって来た全身緑色の生物を飲み込むように襲いかかる。

その衝撃で吹き飛ばされた全身緑色の生物は、まだなお自身に纏まとわりつく炎の中で、もがき苦しんでいた。

その全身緑色の生物とは、それはそれは巨大な巨大な毛虫。

その長さが５メートルくらいある巨大毛虫が、長い胴体を俊敏にクネクネクネクネと曲げるそのおぞましい姿は、見た者に鳥肌は必須。人によつては激しい嘔吐を催させる威力があつた。

唯一の救いは、匂いが非常に良いということだけである。

「うわ……」

その光景に思わず２人も声が漏れる。

２人が島中央の巨大ブロッコリーに向け、歩き出してから数時間。その間に今回を合わせて１０回目となる虫の襲撃を受けていた。

森に入り、まず２人に襲いかかってきたのは、ラグビーボール大のイナゴの大群。初遭遇ということもあつたのか、その余りの気持ち悪さという衝撃に、エースは無心で暴れ、半径１０メートルを焼

け野原にした。そのせいでジェイの黒いコートが少し燃えてたりする。

次に現れたのはバイク大のトノサマバツタ。これはジェイが飛ばした毒針のおかげで、2人の前に現れた瞬間に息絶えた。

それから土の中から大蛇のようなミミズ、水の中からワニのよなヤゴ、さらには空から普通鎌より数倍鋭い刃を持つカマキリなどが立て続けに襲い、今は巨大毛虫が巨大なキャベツに空いた穴から、まるで蛇のように蛇行しながら襲いかかってきたのである。

流石の2人も休む暇もない、何より巨大な”虫”達の襲撃に、身体的にはもちろんだが、より精神的な疲れの色が強く顔に浮かんでいた。

「少しあそこで休みましょう。流石に疲れました」

何時もよりさらに白い顔をしたジェイは、そう言って無駄に良い匂いのする毛虫の丸焼きをあまり見ないようにして、歩き出す。

しかし、エースが歩き出す気配がないのに気づき、不思議に思っ  
て後ろを振り返ると、エースは何やら考え事をしながら丸焼きを眺  
めていた。

それを見たジェイは、急に顔から血の気が引き、慌ててエースに  
近づき肩を強く揺する。

「ち、ちょッ、ちょつとッ!? エース!?!」

「ん? あ、ああ、どうした?」

「……変な事考えてないでしょうね？」

「変な事？　なんだ？　そりゃ」

「私に言わす気ですか！？　ええっと、それは、ですね、………  
………いやいやいやいや、無理無理無理無理。絶対言えませんッ」

いきなりジエイは額の前で何かを消すように手を頻り《しきり》  
にパタパタとする。

「どうした、お前エ。遂に気でも狂ったか？」

「……うるさい。とりあえず何も考えてなかったんですね？」

せつかく心配したのに、うるさいと言われた事に驚きながらも、  
ああと返事をする。

それを聞くとジエイは安心したのか、良かったと一言呟き、息を  
吐いたのだった。

（良かった……。流石にエースでも思わなかったようですね。）

（どうしたんだ、コイツ……。変な奴だな。それよりさっきのアレ  
）

（（　美味そうだったな）って……）



ここでは、医療部隊の人達の頑張りにより、二日酔いのクルー達も、幾分か顔色も良くなって、船内は活気づいてきていた。

「今からエース達追いかけるか？」

など言う者もちらほら見かける。

ただ、そう言うてはいるが、巨大な虫達のせいか、まだ体調が良くないせいかはわからないが、本当に森に行こうとする者は出てこない。

「怖じ気づきおって……」

それを見て苦笑い零すのはバルダ。しかしそんなことを言いながらも、目はまるで見守るような優しい目をしていた。

不意に、そんなバルダの目が急に鋭くなり、視線がある男を捉える。

タレ目の骨張った顔には、やや皺しわが見えており、ひよろつとした体型。裾がぼろぼろのちよつと丈が短い黒いズボンに、上は灰色のポンチョを着、いかにも旅人らしい格好をしているその男は、バルダと目が合うとゆっくりと船へと歩いてくる。

それを見てバルダも刀を背中に背負い、船を降りる。

その様子にクルー達も気づき視線を2人へ向ける。

男はバルダから5メートルくらい離れた所で立ち止まり、話し出

した。

「まあまあ、皆さん落ち着いて。こっちに戦闘の意志はないよ。ただ確認しにきただけさ」

そう切り出され、バルダは首をひねる。

「確認？ なんのじゃ？」

「いや、そんな大層な事じゃない。新しく来た手配書がおたくらにそっくりだったから、本人かどうかを見にきただけだよ」

そう言つて、懐ふところから三枚の手配書を取り出し、バルダに渡す。

バルダはその三枚を受け取り、見るとそこには確かにバルダ、エース、ジェイの顔が載っていた。

「うむ、確かにこれらはわしら”スピード海賊団”のじゃ。しっかし何故わしの額が上がつとるんじゃ……」

「まあ、そこらへんは後で自分の胸に手をあてて考えてくれ。それでよ、後の2人はどこにいるんだ？」

その質問に、バルダの眉が僅かに上がる。

「……2人は今は森におるはずじゃが」

「そうか……。あんがとよ。それじゃもう俺は戻るわ。ログが書き換わるまで心行くまで楽しんでいってくれ」

最後にじゃあなと言い、去って行く男の背中を、バルダは見つめ続ける。

(……あやつの目、何か隠しとるのお)

男の姿が街に消えて、バルダはもう一度、男に返し忘れた手配書を見る。

まず文字を見て鼻で笑う。

「火拳」 剛剣」に、「悪魔殺し」か。えらい物騒な二つ名じゃのお

次に数字を見て今度はクツクツと声も漏れ、肩も動く。

「そんな名前のくせに、この金額……。クツクツクツ、傑作じゃわいっ

そして遂に大きな声で笑い出す。

白いフードを浅く被り、目は僅かに細められ、何かを見下ろしているのか、視線は下を向いている。銀の髪に白い肌、そしてその頬に、狙ったかのように付いている赤い血が妙な存在感を放ち、それはまるで作り物のよう。

”悪魔殺し”のジエイ。

懸賞金50万ベリー。

「エースが馬鹿にする姿が浮かぶの」

その姿を想像し一人笑うバルダを、他のクルー達は微妙な目で見ていた。

一方その頃、ジェイはというと、側にエースはおらず、一人ひたすらとブロッコリーに向かって走っていた。

このような状況になっている理由を知るためには、少し時間を遡る。

2人は昼飯を食べ終わった後、近くにあつた巨大根の葉を切り取り、そこから出てくる水を飲みながら、歩いてきた。

すると2人の前にまた巨大毛虫が現れたのだ。

エースはそれを今度こそはと、再び丸焼きにして食べようとした所を、鬼の形相をしたジェイによって阻まれる。

それに対して今回はエースが、一口くらいくれとゴネた。だがジェイも譲らず、2人は立ち止まり言い合いになった。

これがいけなかった。

ふと気付くと、毛虫の周りには、犬くらいの大きさの何かが数匹。

光沢のある茶色い固い胴体に、黒く鋭い牙は一度刺されると激しい痛みを伴う。

その正体は人を殺した事もある、巨大軍隊蟻。

それはどんどん新たに現れ、あっという間に巨大毛虫は蟻によって見えなくなった。

その光景に固まる2人。

そして遂に巨大毛虫についていた一匹の蟻が、2人の方へ顔を向ける。

その瞬間、2人は一目散に振り向くことなく走り出した。

蟻は素早く、最悪なことにその先にも数十匹の蟻に囲まれていたが、2人は迷うことなく無理やりに突っ切っていった。

そんなことがあり、いつの間にか離れ離れになってしまったのである。

だが所詮、2人の目的地は同じ島中央の巨大ブロッコリー。

ゆえに、ジエイは迷うことなく、野菜の森を走り抜けていく。

その走りには一切の音は無く、まるで走る姿という映像を森に映しているだけかのように錯覚させられる。

そんな走りをノンストップで続けること数十分。

遂に、野菜の森を抜けた。

額に汗は浮かんでいるものの、疲労の色は見えないのは流石と言った所か。

今は目の前に広がる光景に驚いていた。

「……すごいですね」

この島の中央はブロッコリーが巨大過ぎるために、一日中日光が当たらない場所があり、そこに野菜は一切無く、ただ湿った土があるだけだと言われていた。

確かにそこに野菜はない。

だが、違う点が一つだけある。

それは、あるのが湿った土ではなく、遺跡。

破壊されてはいるが、かつて人が住んでいた痕跡がしっかりと残っていた。

その痕跡とは、食器であったり、剣であったり。

ジェイはある壊れた壁を見て一瞬立ち止まる。

そして、震える指でそれをなぞる。

「これは……、ポーネグリフの、古代文字……」

その刹那。

「くッ」

キンッ！！

一本の矢が空を切り裂いて飛んでき、ギリギリそれを弾く。

ジェイが、矢の軌跡を辿るとそこには、一人の騎士。

ややつり上がった目に鋭く光る黒い瞳は意志の強さを感じ、肩にはかからない程度のサラサラした髪の毛の深紅の色がさらに迫力を倍増させる。

上下は白の輝く鎧を着て、手には柄が真っ赤な槍。

その力強く迫力ある姿は、まるで国を守るの騎士。

「ここまでご苦労であった。しかし、残念ながら貴様の命、この僕がもらい受ける」

赤い槍が今、唸りをあげる。

同時刻。エースも遺跡に着いていた。

そこにはジエイも居らず、興味のない遺跡がごろごろあるだけで、エースはすっかり暇を持て余していた。

「暇だ。……あのブロッコリー食えっかな。ん!!」

ブロッコリー見上げていると、急に鉛玉が飛んでき、それをジャンプで交わす。

パパンツ!!

「うおツ!!」

着地した瞬間に今度は後ろから飛んてくる。

それを避けるとまたと、四方八方から飛んてくる。

それを繰り返しているうちに気付くとエースは、周りが高めの遺跡に囲まれた広場みたいな所の中央に、立っていた。

発砲は止むも敵は出てこず、いるのは遺跡に止まっている数匹の蜂。

敵が出て来ないのを見てエースは不適に笑う。

「おいツ!! もっと打って来い。ちゃんと俺の暇潰しになれるよにな」

高らかと言ったエースの言葉を合図に、戦いの火蓋が切って落と

された。

第十一話 『野菜の森』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

いつの間にか18万PVと3万ユニーク突破しておりました。

感謝千万です!!

皆様ありがとうございます。

そしてこれからもよろしくお願い致します。

かっぱ巻き

第十二話 『衝突』（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

更新再開します。

## 第十二話 『衝突』

「ハアアッ！！」

ギーン！！

真紅の槍と漆黒の双剣が衝突を繰り返す。

その衝突で生まれる衝撃破が周りの地面を揺らし、刃同士がぶつかる高い音が止むことはない。

「ヤッ！！ ハアアッ！！ セイヤッ！！」

槍は唸りを上げ右、左、下からと、ジェイ目掛けて襲いかかる。

ジェイはそれを最小限の動きで交わし、カウンターを狙うが、一歩踏み込むと同時に一歩下がられてなかなかきまらない。

「誰に雇われた？」

余裕があるのか、ジェイに喋り掛ける。その間も槍は決して止まらない。

「……雇う？」

「しらばっくれるな。ハアッ！！ 貴様らの目的などすでにお見通しッ！！ またグリリットの命か！？」

(……グリリット？)

「何故にそこまで狙う！？ ヤッ！！ 継承権を辞退なさったでは

ないかッ!！」

(……継承権)

初めて耳にする情報が、ジェイの頭を徐々に浸食していく。

(どういことでしょうか……。わからないのなら聞き出すまで)  
「私達に目的などありません」

それを聞くと、騎士の紅い目がさらに鋭くなり、攻撃に力が増す。

(釣れましたね)

その様子を見て、ジェイは細く微笑む。が。

「見苦しい嘘をつくなッ!! 姫様を狙いに来たのだろっッ!!」

(……姫?)

全く想像していなかった言葉に、ジェイの頭がその事に集中してしまいい、動きが鈍る。

「紅龍ッ!！」

「ぐッ!！」

その一瞬を逃さず、一気にスピードを上げてジェイへと近づき、今までは段違いに鋭い突きが、地面スレスレからジェイの首へ駆け上がる。

その紅き槍の様は、まさに龍の如し。

ジェイはギリギリ剣を無理矢理当てて進路を変えたが。

「ッラアッ!！」

「ぐっッ!！」

その反動で出来た隙だらけの腹へ、重い蹴りが入り、ジェイの体が宙を舞う。

「これで終わりだッ!！」

さらに追い討ちをかけるように、ジェイの落下地点へと駆ける。

ギラつく紅い槍は再び、獲物を咬み殺さんとする龍になる。

「さらばだッ!！」

自分の間合いに入り、槍の刃のすぐ手前に右手、左手は後方を握り、それを膝くらいに構える。後は力一杯突くのみ。目に入る動くモノ全てがスローモーションになる。

(いけるッ!！)

落下しながらゆっくり回転するジェイを凝視し、槍をさらに強く握りしめる。

(今ッ!！)

「紅り」

ふとちよつど回転して見えたジェイの顔。ぶつかる視線。

「ゆ……ッ……！」

ジェイの瞳は揺らぐが静かに、そして恐ろしく冷たく騎士を見つめる。

時が凍りつく。瞬間　血が舞う。

「うううッ……！」

まずは左目をもぎ取られる。そして激痛にのた打ち回る暇を与えず、左肘は逆方向に曲げられ、左膝は粉々に潰され、右手足は切断腹には剣が奥まで刺さり、最後に喉を食いちぎられる。

身体中から血が勢い良い吹き出し、グチャグチャと肉片が当たりに散らばる。

ヒューヒューと息を吸つてもどこからか抜ける。意識は朦朧とし、残る右目でぼんやり見えるのは、血だらけの中で笑みを浮かべるジェイという名の死神。

そして死神は、ほとんど死んでいる騎士に向けて両手で持った大きな黒い鎌を上げ、容赦なく振り下ろした。

時が溶ける。

「……はッ……！」

ダンッ……！という音で騎士は我に返る。

目の前には両手足をついて着地したばかりのジェイがおり、それに気付いて慌てて弾かれたように後方へ跳ぶ。

「な、な、なんだ今のは……」

自分の両手足を確認してもしつかりと付いている。急いで左目に手を当てると、ピチャと液体が付いて慌てて引くも、それはいつの間にかかいていた大量の汗。

そして前を見れば、そこには血だらけでも鎌を持ってもない、さっきの一撃でフードが破けただけのジェイが立っていた。

「……ま、幻……か……」

茫然と無表情のジェイを見ると、騎士のカラカラに乾いた口の中に、胃から酸っぱいモノが込み上げてくる。

（今の幻は、ただの……殺気？）

「ふふっ」

「ッ！ー！」

ジェイが微笑んだだけで、反射的に跳び下がる。

「クッ！ー！」

自分のした逃げるような行動に声を漏らし顔をしかめる。

（何をしているのだ僕は！！ 冷静になれ！！）

ジェイをしつかりと見据えながら、一度自分に喝を入れ、額から流れてくる汗を片手で拭き取る。

その際、僅かに視界が汗を拭く手でいっぱいになった。そして再び視界が開けた瞬間

「なっ！！！？」

自分の視界には、誰もいなかった。

「ふふつ。よそ見はダメですよ。例えそれが、ほんの一瞬でも……ね」

時を少し遡り、もう一つの決戦地。

バババン！！

「ホッ、ホイッと」

四方八方から飛んでくる鉛玉を、エースは驚異的な反射神経で交わしている。

非常に危ない状況なのだが、本人はそういうゲームをしているかのように楽しそうな表情をしていた。

バババンッ！！

「よッ、と」

一際大量に放たれた鉛玉を、エースは飛び上がり空中で体を捻ってかわす。

そしてそれが最後の攻撃だったのか、先程まで鳴り響いていた銃声が止み、辺りを静けさが包む。

「なんだ？ もう終わりか？」

エースの問い掛けに答える音はなく、森から強く吹く風と、それによって揺れる草木の音しかない。向こうも無駄だと悟ったのだろうか、攻撃して来る気配がない。

それを感じて、エースは自身の体を確認する。するとそこには、腕、足、横腹にそれぞれ一カ所ずつ傷が出来ていた。その傷は出血さえしていないくらい極々浅い傷である。

だがそんな事は問題ではない。

問題なのは、エースの体に、“ロギアの能力者”に傷が出来た、ということだ。

確かにエースは自分が楽しむために、わざと能力の使用を抑えていた。だがそれでも攻撃を食らえば自然と出てしまうものだ。

故に、この事実は立派な問題であり、同時に一つの可能性を示していた。

「……へー」

（これがジェイの言ってた……）

まさかロギアの能力を持つ自分に極々僅かでも傷がついてる事に、エースは驚き、そしてニヤリと笑った。

「……覇気使い、か」

以前、ジエイが敵を知れということ、数少ないロギアに対抗できる手段を教えていた。

その中の一つにあった“覇気”をエースは思い浮かべた。

“覇気”とは3種類あり、その一つに“武装色”というものがある。これは、見えない鎧を着る様なイメージをもって、体や武器を硬化させることができる覇気である。

これを使えば、ほぼ無敵にすら感じるロギア的能力者の体も実体としてとらえることができるのだ。

「ハハッ。早速そいつと戦えるなんてな……。ツイてるぜ」

勝手に自身体が高ぶってくるのをエースは感じる。

僅かに周囲の温度が高くなる。

「来たか」

気配を感じ、そちらの方へ視線を向けると、そこにはこの場に全く不釣り合いな一人の少女がいた。

150くらいの小柄な体型に、服装は赤地の生地、白、紫、藍からなる辻ヶ花と小さな蜂が施された着物を着ている。

真っ直ぐで綺麗に切りそろえている黒く艶やかな長い髪によって、透き通るような白い肌が際立つ。

そして何より人形のような造りをした顔に命を息吹を感じさせるのは、パッチリとした目に浮かぶ紫色の瞳。

どこか夢の世界から抜け出して来たような美少女だが、一つだけ大きな違和感を感じる。

それは右手にあり

それは黒く

それは艶やかな

マグナム。

ドンッ！！ドンッ！！

「くッ！！」

あまりの不釣り合い差に気を抜いていたエースを、一瞬で放たれた銃弾が襲う。

それをギリギリでかわすも、頬に傷が出来る。

（糞が）

傷が出来たことにイラつき、少女を睨む。が

「なッ！！」

既に目の前には数十メートル離れていたはずの少女の姿。

「ぐッ！！」

体型に似合わない少女の鋭い蹴りが、ロギアであるエースの横腹を捉え、吹き飛ばす。

直ぐに少女は追い討ちをかけるよう、吹き飛ばしているエースへと迫る。

それを防ぐためにエースは火の弾を数発放つが、まるで飛んでいくかのように最小限に交わし、遂にエースに肉迫した。

銃口をエースの額に向け、指をかける。

「……おしまい」

少女の鈴のような小さな声が響く。

ドンー!!

ズザーツと引きずりながら地面に落ちたエース。スタンと着地した少女。

「……チッ」

小さな舌打ちを合図に少女は再び飛び出す。それと同時にエースも跳ね起き、2人は接近戦へと突入する。

あの時なぜエースが打たれなかったかというところ、それは少女が引き金を引く一瞬間に、エースが飛ばされながらも無理やり体を捻り蹴りをくり出したからだ。

その蹴りがマグナムに当たり、ギリギリで進路を変えたのである。

「らッ！！」

エースから次から次へと繰り出される攻撃。

しかしそれをひらりひらりと交わし、反撃を加える少女。

「……クッ」

だがそれでも、その反撃さえも無視してエースは攻撃に攻撃を加え、その速さはさらに上がって行き、遂には少女を捉え、会心の拳をぶち込む。

ガンッ！！

「……グッ」

それをギリギリでマグナムを盾にして直撃を防ぐが、衝撃はそのまま伝わり、顔が痛みを歪む。

それを逃れるように少女は飛びあがる。

「逃すかッ！！ 火拳ッ！！」

エースの突き出した拳が炎へと変わり、大きな炎の渦が少女を襲う。



大規模な爆発の影響で火が飛び散り、大量の煙も上がり、爆心地は全く見えず、エースの状態を確認することはできない。

そしてそれを、浮いたままの状態で、表情を変えることなく凝視する少女。

次第に爆発の余韻が収まり、視界が晴れる。

「…………チツ」

そこには、体が所々炎に変わってメラメラと燃えながら立っているエース。

視線は逸らすことなく少女を見つめ、不敵に笑っている。

「…………ずるい」

「へへッ。それはま、仕方なねエ。オレの能力だ。諦めてくれ」

その言葉に少女はやや視線を下げ、「そう」と呟き、再び合わせる。

その綺麗な紫の瞳は先程より力が込められていた。

（…………来るッー！）

「…………なら…………」

「ッ！！」

グン！！と少女から放たれた普通の人間には耐えることがまず出来ない程の覇気が、エースを襲う。

（これが”霸王色”……）

”霸王色”とは3種類ある覇気の一つで、扱える者は数少ないとても希少な覇気。

これは相手を威圧する力であり、本人の成長でのみ強化する、使用者の気迫そのものなのである。

つまり、今それを放っている人形のように可憐な少女は、めったにいない強者つわものということである。

「……ここから、本気」

スツと少女が右手を上げる。

するとどうだろう。

周りの遺跡の中からブーンという羽音をたてながら、数匹、数十匹、数百匹、数千匹もの蜂が飛び出してき、瞬く間に空一面を覆った。

「おいおい、嘘だろ……」

そしてその蜂の大群の、一際密度が高い中央に堂々と佇んでいる少女の姿は、まさしく女王蜂。

「せいじ」

「……私の能力、……諦めて」

ゾオン系ハチハチの実。モデル”女王蜂”。

その能力は蜂を造り出し操り、自身も空を自在に飛び、猛毒をも作り出せる。

その反則的姿にエースは、へへッと嬉しそうに笑う。

(……おもしれエ)

そしてグツと構える。

「んじゃ、オレも本気だ」

エースの目が鋭くなり、体が所々炎に変わり、周りが一気に熱さをます。

お互い静かに睨み合う。

一陣の強い風。

それを合図に少女は右手を振り下ろそうと、エースは技を繰り出そうとした瞬間。

ザンッ!!

「ッ!」「」

どこから飛んできた黒く輝く剣が、2人の間に突き刺さった。

「お姫さんとお馬鹿さん、これ以上遺跡を潰されたくないんで、終了してください」

第十二話 『衝突』（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

かっぱ巻きです。

ご無沙汰過ぎて申し訳ありません。

これからまた心機一転して更新を頑張りたいと思います。

どうぞまたよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3571m/>

---

J

2011年8月31日11時12分発行